2018年10月15日発行 季刊発行 通巻132号

英検

英語情報

2018 秋号 AUTUMN

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

「外国語（英語）教育強化地域拠点事業」に学ぶ 小中高連携のあり方

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課
直山 木綿子 教科調査官

CLASS REPORT

千葉県立流山おおたかの森高等学校
千葉県 流山市立南流山中学校
千葉県 流山市立南流山小学校

明日から使える！英語で授業 7つの鉄則

宮城県仙台南高等学校

高大接続改革ニュース

TEAP、英検が選ばれている理由

全英連滋賀大会に向けて

授業実演者インタビュー

明日から使える！
授業のテクニックを動画で見られる！
AR
英語情報 『英語情報』専用アプリで写真をかざすだけ！
※詳しくは表紙裏面で！

小・中・高・大の英語教育の“今”を『英語情報』がお伝えします。

新学習指導要領の全面実施に向けて、
これまで以上に、児童生徒主体の言語活動を中心とした授業が求められ、
小・中・高・大をつないだ英語教育改革が進行しています。
『英語情報』では、国の動向から小・中・高の授業改善の取り組み、
大学の入試改革やグローバル化まで、英語教育の最新事情をお届けします。
明日からの授業づくりや指導にどうぞお役立てください。

Information

「英語で授業ができるか不安」「言語活動の具体例が知りたい」
そんな先生方のために

『英語情報 AR』アプリで誌面で紹介した授業の動画を視聴できます。

NEWS 再生期限切れになった過去の動画も見られるようになりました！

STEP 1 アプリをダウンロードします。（無料）（iOS/Android対応）

スマートフォンかタブレットを用意して、
Download on the App Store または ANDROID APP ON Google play から「**英語情報 AR**」と検索し、ダウンロードします。

STEP 2 アプリを起動し、画像をスキャンします。

本誌記事中の AR マークの付いた画像が **枠内に収まるようにスキャン** します。

STEP 3 動画が再生されます。

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。

一度スキャンした動画は「履歴」をタップすれば、いつでも動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad ➡ iOS 7.0 以上、
Android ➡ ver. 4.0 以上。
［Android版は一部対応していない端末がございます。インストール画面の動作確認端末をご確認ください。］

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE環境を推奨しています。

英語情報

2018 秋号
CONTENTS

12

14

16

22

02 **緊急企画**
02 平成30年7月豪雨（西日本豪雨）
がんばろう西日本 心をつなぐメッセージ

04 **最新情報**
04 NEWS & TOPICS

06 **特集**
06 「授業改善を考える」
「外国語教育強化地域拠点事業」に学ぶ
小中高連携のあり方
文部科学省初等中等教育局 教科調査官　直山 木綿子

CLASS REPORT
AR 12 〔高等学校編〕
「外国語教育強化地域拠点事業」で連携が深まり教員や児童生徒が学び合う体制が築かれた
千葉県立流山おおたかの森高等学校 教諭　玉永 崚

AR 14 〔中学校編〕
自ら考え、友達と意見を交換しながら学びを深めていく技能統合型の授業づくり
千葉県 流山市立南流山中学校 教諭　平井 利明

AR 16 〔小学校編〕
教員、学校長、教育委員会が一体となり取り組む目の前の子供たちの実態に合う授業づくり
千葉県 流山市立南流山小学校 教諭　野口 祥奈

18 **授業改善**
18 〔連載〕【第3回】
中学校・高等学校の
授業改善と評価のあり方
明海大学 教職課程 准教授　百瀬 美帆

20 〔連載〕【第3回】
小学校外国語活動・外国語科の
授業で使える「評価」のためのアイデア
愛知県立大学 外国語学部 准教授　池田 周

AR 22 〔連載〕【第17回】 安河内 哲也先生が聞く
明日から使える！英語で授業 7つの鉄則
宮城県仙台南高等学校 教諭　大野 智彰

26 〔リレー連載〕新学習指導要領に向けて
〔高等学校編〕【第3回】
生徒同士のやり取りを通じて、意欲と力を伸ばす授業
新潟県立新潟高等学校 教諭　荒木 美恵子

〔中学校編〕【第3回】
「意見・考えを大事にする授業」を実現するために
福井県教育庁 義務教育課 主任　加藤 修

〔小学校編〕【第3回】
児童一人一人の学び方を大切にした特別支援学級での外国語活動
滋賀県 東近江市立湖東第二小学校 教諭　西河 彩恵子

32 **高大接続改革を見据えて**
AR 32 〔高大接続改革ニュース〕
TEAP、英検®が選ばれる理由

36 TEAP Hot News!
第9回 TEAP連絡協議会レポート

38 **指導のヒント**
38 〔連載〕【第3回】
英検2級・準2級・3級
ライティングテストを活用した発信力の育成
Write more. Write well. Write it right!
清泉女子大学 文学部 英語英文学科 教授　大井 恭子

40 **Pick Up! 英語教育**
40 〔EVENT REPORT〕
「2018年度 全英連・英検共催 小中高英語教員向け国内研修」レポート
新学習指導要領を見据えて、児童生徒主体の授業づくりを学ぶ

44 〔直前特集〕
全英連滋賀大会に向けて
授業実演者インタビュー

46 〔特別記事〕
2つの専門コースでグローバルリーダー育成をめざす
大阪府立桜塚高等学校の英語教育と英検®への取り組み

48 〔REPORT〕
「英語能力向上事業」から見えてきた
英語指導上の課題

52 **教員研修**
52 〔EVENT REPORT〕
英語教員海外研修 帰国後の学び
第18回小学校英語教育学会（JES）長崎大会に集う研修参加者たち

54 『英語情報』オススメ本

緊急企画：平成30年7月豪雨（西日本豪雨）

がんばろう西日本 心をつなぐメッセージ

2018年6月28日から7月8日にかけて、台風7号と梅雨前線等の影響を受けた記録的な豪雨によって、広島県、岡山県、愛媛県を中心とする西日本の多くの地域で河川の氾濫や浸水害、土砂災害が発生しました。その後、9月に入ると、非常に強い勢力で日本に上陸した台風21号の影響により、近畿地方を中心に大きな被害が出たのに続き、北海道では胆振地方中東部を震源とする最大震度7の地震が発生し、日本各地で相次いで甚大な被害がもたらされています。

折しも、『英語情報』では前号『英語情報2018夏号』のリレー連載「新学習指導要領に向けて 中学校編」にて、岡山県倉敷市立真備中学校の黒明堅一郎先生の実践報告記事を掲載しておりました。その真備中学校が、このたびの平成30年7月豪雨（西日本豪雨）にて浸水被害に遭いました。

現地では休校していた幼・小・中・高等学校の授業が再開していますが、まだ被災された方々は避難生活を余儀なくされ、不安を拭い去ることのできない日々を送っておられます。そのような状況のなか、黒明先生から寄せていただいた2018年9月現在の現地の状況についてお知らせいただきましたので、ご紹介いたします。

また、過去に東日本大震災、熊本地震、鳥取県中部地震によって被災した地域の先生方から『英語情報』編集部へ寄せられた応援メッセージを、このたび被災された地域の先生方、生徒の皆さんへお届けいたします。公益財団法人 日本英語検定協会では、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復旧をお祈りいたします。

岩手県教育委員会 主任指導主事 佐々木 淳一 先生

西日本豪雨で犠牲になられた方々に対し、心からお悔やみ申し上げますとともに、被害に遭われた皆さまにお見舞いを申し上げます。

被災された地域には、以前の穏やかな日常を失った子供たちが多くいることと思います。先生方は、そういった子供たちと向き合いながら、通常の教育活動に加えて、子供たちの安全確保や心のケアなどに尽力されていることと思います。被災地の様子が報じられるたびに胸が締め付けられ、一日も早い復旧・復興を願わずにはいられません。

7年半前、岩手県は、東日本大震災により沿岸部を中心に甚大な被害を受け、震災直後には被災地の多くの学校が避難所となりました。先生方は、避難所運営などの対応に追われましたが、そのようななかで学校を再開するための準備にも献身的に取り組まれました。

各地で少し遅い新学期を迎え、授業が再開されると、教室にはいつもと変わらない子供たちの姿が戻ってきました。授業のなかで、先生方が子供たちに語り掛けたり、子供たちが互いに関わり合ったりすることが安心感を生み出し、不安を抱えていた子供たちの表情が日々明るくなっていきました。

毎日の授業そのものが、子供たちや先生方にとってのかけがえのない日常であり、その日常がここにあるという実感が、次の一歩を踏み出す原動力になるということに、私たちは改めて気付かされました。

被災地の先生方には、大変な状況の今だからこそ、授業を通して子供たちに安心と勇気を与えていただきたいと思います。

岩手から、被災された皆さまが一日でも早く日常の生活に戻ることができるよう、心よりお祈りしております。

熊本市立北部東小学校 校長 園田 恭大 先生

西日本豪雨で被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになられた方々に心から哀悼の意を捧げます。『英語情報2018夏号』で取り組みが紹介された倉敷市立真備中学校でも、先生方は夏休みも後片付けに追われ、それでも2学期のスタートを学校では迎えられず、近くの大学の校舎をお借りしての授業になるとお聞きしました。想像を超える大変な状況でも、真備中学校をはじめ被災地の先生方は、いかなる困難のなかでも希望を燃やし続け、少しでも質の高い教育を展開せんがための努力を続けておられることに敬意を表するところです。

先の熊本地震の際、当時の私の勤務校も避難所となり、大勢の避難者のお世話を職員とともにさせていただきました。地震直後は、生徒の安否確認もままならない状況もありました。

「苦難福門（苦難は幸福の門である）」「心即太陽（希望は心の太陽である）」という言葉を聞いたことがあります。避難所の経験から、地域の状況が厳しければ厳しいほど、学校が地域に希望の灯をともせるのではないか、と思っていました。そして、教育の力で「福門」をゆっくりと確実に開けることができると同時に、先生方が児童・生徒や地域の方々の「心に灯りをともす」ことができるのでは、と信じて先生方と取り組んでいました。このとき、児童・生徒や保護者、地域の方々の心に蒔かれた、教育で大切な「信頼」「親しみ」という種が芽を出し、そこに、復興とともに充実してくる教育課程が重なって、幹が伸びていくように思います。九州、そして熊本から、一刻も早い復興を心よりお祈りいたしております。

復興への歩みはまだ始まったばかり

岡山県 倉敷市立真備中学校 黒明 堅一郎 先生

大学の教室を間借りして、ようやく2学期を迎えて授業を開始しました。

2018年7月7日未明、倉敷市真備町では小田川の堤防が決壊し、一帯に大規模な浸水被害が発生しました。真備中学校では校舎2階の床上80cmの高さまで泥水が押し寄せて浸水しましたが、前日より「大雨警報」が発令されて臨時休校となっていたため、生徒たちは全員、自宅待機となっていました。

生徒たち全員の安否が確認できるまでには1週間近い時間を要しました。校舎の浸水状況がひどく、すぐに授業は再開できないため、学校は休校となり、1学期の終業式をできないままに、生徒たちは夏休みを迎えることとなりました。それからは、私たち教員は、校舎内に入り込んだ泥などをかき出す作業に追われる日々でした。そして、被災した生徒たちが暮らす避難所や住宅などを訪ね歩き、対面して回りました。学校に行けず、友達や先生に会えない毎日で、生徒も私たち教員が訪ねて行くのを喜んでくれました。また、生徒たちは自宅の復旧作業を手伝うばかりか、友達の自宅にも出向いて復旧作業を手伝い、自ら積極的に助け合おうとする姿には胸を打たれました。

校舎の復旧には時間がかかるため、同じ町の隣の中学校のグラウンドに現在、仮設校舎を建設中です。完成するまでの間は、倉敷市内の倉敷芸術科学大学が校舎を提供してくださることになり、2学期は予定通りに9月3日から開始することができました。教員はお盆明けから2学期の準備を始めてきましたが、教科書も早く届けられ、全国からは支援物資がたくさん届いています。また、岡山県に本社のある学生服メーカーからは、生徒たちの制服を支援していただく予定です。現在は、制服と私服の生徒が混在していますが、近いうちに全員に制服が行き届く予定です。ようやく2学期が始まり、教員は授業ができる喜びを、生徒は学ぶことができる喜びや友達と会える喜びをかみしめています。全国の皆さまへの深い感謝の気持ちでいっぱいです。

被災後すぐは報道も多く、全国の皆さんの関心も集まっていましたが、時間が経つにつれ、西日本豪雨に関する報道は少なくなってきました。しかし、私たちの復興への歩みはまだ始まったばかりです。どうか、全国の皆さん、このことを心の片隅においてくだされば幸いです。

福島県 楢葉町立楢葉中学校 松本 涼一 先生

私は、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所の事故で、避難生活を経験しました。震災発生直後から勤務校が避難所になり、我々教職員はその運営を任されました。電話がつながらず、自分の家族の安否も分からないなかで、ボランティアとして徹夜で働きました。テレビでは、私が住む地域で津波により20、30軒の家が流されたとの速報が流れ、避難所運営をしながらも気が気でなかったことを覚えています。

この豪雨で被災された先生方のなかには、同じような思いをされた方がたくさんおられるのではないでしょうか。家族も大事、目の前で困っている教え子や地域の人も大事。二者択一でどちらかを取るということは、このような状況では成り立たないことを、この時に実感しました。

私は震災後、2年の間、福島や家族のもとを離れ、勤務していた町の関係で埼玉県加須市の中学校で働くこととなりました。福島県外で働くなど考えたこともなく、戸惑うことばかりでしたが、その時に常に心にあった言葉があります。「いま、ここ」です。働く場所が変わっても、家族とは離れても、「いま自分がいる場所で、自分ができる最大限の仕事をすること」が、生徒や自分の家族の未来の幸せにつながるのだと信じ、働きました。

西日本の皆さん、今はたとえ辛くても、笑える日がきっとやって来るはずです。皆さんにはそれを信じてほしいです。福島から、そのような日が1日でも早く皆さまの元に来ることを祈っております。

鳥取県 倉吉市立東中学校 山根 晃治 先生

この度の西日本豪雨において、甚大な被害を受けられた地域の皆さま、学校の先生方、本当に大変な思いをされたこととお察しします。その後、少しずつこれまでの生活に戻りつつあると伺い、ひとまずは安堵していますが、どうかご無理はなさらないようにしてください。

私も2年前に、今勤務をしている中学校で大きな地震により被災しました。ちょうど英語の授業をしている時でしたので、揺れが収まるとすぐに子供たちをグラウンドへ避難させ、不安でいっぱいの子供たちを落ち着かせることに努めたことを思い出します。また、その翌週からいつも通りの学校生活が再スタートしたのですが、やはりどこか元気のない子供ばかりだったことも思い出されます。今回の豪雨で被災された学校でも、きっとそのような子供たちが多くいるのではないのでしょうか。

だからこそ、私たち教師が今、子供たちのためにできること。それはやはり、授業のなかで先生と子供たちとが「つながる」こと、子供たちと子供たちを「つなげる」ことなのではないでしょうか。自分の気持ちをお互いが伝え合い、受け止め合い、そこに「つながり」が生まれると、その不安は安心へ変わります。それが英語の授業を通してできれば、きっと子供たちも少しずつ、でも確かに変わっていくのだと思います。

「大変」な時だからこそ、「大」きく「変」われるチャンスです。お身体には十分にお気を付けられながら、安心できる心豊かな授業を大切にして、子供たちを励ましてあげてください。それができるのは、今の皆さんをおいてほかにいらっしゃいません。ともにがんばりましょう。

NEWS & TOPICS

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

NEWS

「英検IBA」4技能化のお知らせ
～2019年4月より申込受付開始～

昨今の英語教育改革や大学入試改革の流れを受けて、4技能のバランスの取れた英語力の育成や測定に注目が集まっています。公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、2019年4月より「英検IBA」を4技能化し、SpeakingはタブレットPCによるCBT方式を採用することにいたしました。「英検IBA」は、良質な英検の問題で構成されており、手軽に安価で英語力を測定できる試験として、これまでにも多くの団体（学校・塾など）や自治体（都道府県・市区町村の教育委員会）で、生徒様の英語力の伸長度の測定やプレイスメントテストとしてご活用いただいております。また、試験結果が英検級レベルおよび英検CSEスコアで示されるため、英検の適切な受験級の把握や、技能別スコアによる伸長度の把握ができ、生徒様への学習指導に有効にご活用いただいております。このたびの4技能化に伴いましても、これらの特長は受け継いでまいります。

前述のように、「英検IBA」では、SpeakingがCBT方式で実施されます。「大学入学共通テスト」に対応する英検の新方式の「英検2020 1day S-CBT」を受験する準備として、CBT方式でのSpeakingの受験に慣れるために、特に、高校1年生前後の生徒様には「英検IBA」のご活用をお勧めいたします。

試験概要は次の通りです。

〔測定技能と試験時間・形式〕

	試験時間	試験形式	実施方法
Reading	25分	PBT（マークシート）	授業1コマで実施可
Listening	20分		
Writing	15分	PBT（記述式）	授業1コマで実施可
Speaking	8分	CBT（吹き込み式）	
合計	RL：45分、WS：23分		

〔テスト種別ごとの測定レベルおよび受験料〕

	テストA	テストB	テストC	テストD	テストE
英検級レベル	準1級・2級	2級～3級	準2級～4級	3級～5級	4級・5級
RL	○	○	○	○	○
WS※	—	—	○	—	—

※テストCから4技能化し、以降、順次拡張していく予定です。詳細は確定次第ご案内します。

テスト種別	料金（税込）
RL	500円
WS	2,700円
RLWS	3,000円

PRESENT!

英語教育関連書籍2冊を各1名様にプレゼント!

英語教育に関する書籍2冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.54をご参照ください。

INFORMATION

実用英語技能検定（英検®）、TEAP、TEAP CBT
2019年度試験日程のご案内

実用的な4技能での英語力を受験生に求める大学が増え、入試での外部の資格・検定試験の活用が広がり、学校教育においても4技能化が進んでいます。英検協会では、より多くの中・高校生に受験機会をご提供するため、2019年度も二次試験の日程を2日間設定いたします。詳細は、協会ウェブサイトにてご確認ください。

■実用英語技能検定 2019年度 試験日程

試験日程		第1回検定	第2回検定	第3回検定
受付期間		3月15日（金）～5月9日（木） 書店受付締切日 4月26日（金）	8月1日（木）～9月12日（木） 書店受付締切日 9月6日（金）	11月22日（金）～12月12日（木） 書店受付締切日 12月6日（金）
一次試験	本会場	**6月2日（日）**	**10月6日（日）**	2020年**1月26日（日）**
	準会場（全ての団体）	6月1日（土）、2日（日）	10月5日（土）、6日（日）	2020年1月25日（土）、26日（日）
	準会場（中学・高校のみ）	5月31日（金）	10月4日（金）	2020年1月24日（金）
二次試験	A 日程	**6月30日（日）**	**11月3日（日）**	2020年**2月23日（日）**
	B 日程	**7月7日（日）**	**11月10日（日）**	2020年**3月1日（日）**

■TEAP 2019年度 試験日程

TEAP	
第1回	**7月21日（日）**
第2回	**9月15日（日）**
第3回	**11月17日（日）**

■TEAP CBT 2019年度 試験日程

TEAP CBT	
第1回	**6月16日（日）**
第2回	**8月11日（日）**
第3回	**10月20日（日）**

EVENT

第68回 全英連滋賀大会 開催案内

全国英語教育研究団体連合会（全英連）は、11月16～17日に滋賀県大津市で開催される「第68回 全国英語教育研究大会（全英連滋賀大会）」の参加者を現在、募集しています（事前申込：10月18日まで）。

大会コンセプト：Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～

第1日◆11月16日（金）

会場：びわ湖ホール（滋賀県立芸術劇場）大ホール
滋賀県大津市打出浜15-1

9:30～10:00　受付
10:00～10:45　総会
10:55～12:25　記念講演
演題　「アクティブ・ラーナーを育てる英語教育」
講師　立教大学 経営学部　松本 茂 教授
12:25～13:55　昼食・業者展示
13:55～14:45　小学校授業説明 小学校授業実演（45分）
授業実演者　大津市立晴嵐小学校　平山 美穂 教諭
指導助言者　滋賀大学　大嶋 秀樹 教授
15:00～15:55　中学校授業説明 中学校授業実演（50分）
授業実演者　竜王町立竜王中学校　関口 真 教諭
指導助言者　関西大学　今井 裕之 教授
16:10～17:05　高等学校授業説明 高等学校授業実演（50分）
授業実演者　滋賀県立虎姫高等学校　川瀬 千津 教諭
指導助言者　立命館大学　山岡 憲史 教授
18:00～20:00　懇親会
会場：ホテルピアザびわ湖 6階 クリスタルホール
滋賀県大津市におの浜1-1-20

第2日◆11月17日（土）

会場：ピアザ淡海（滋賀県立県民交流センター）
滋賀県大津市におの浜1-1-20
コラボしが21
滋賀県大津市打出浜2-1

9:00～ 9:30　受付
9:30～11:00　分科会 第1部
11:20～12:50　分科会 第2部
13:10～　エクスカーション

※分科会発表の詳細は、全英連ホームページにてご確認ください。

詳しくは　第68回　全英連滋賀大会　検索　※全英連滋賀大会直前特集記事をP.44～45に掲載しています。

※英検®は公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

「外国語教育強化地域拠点事業」に学ぶ

小中高連携のあり方

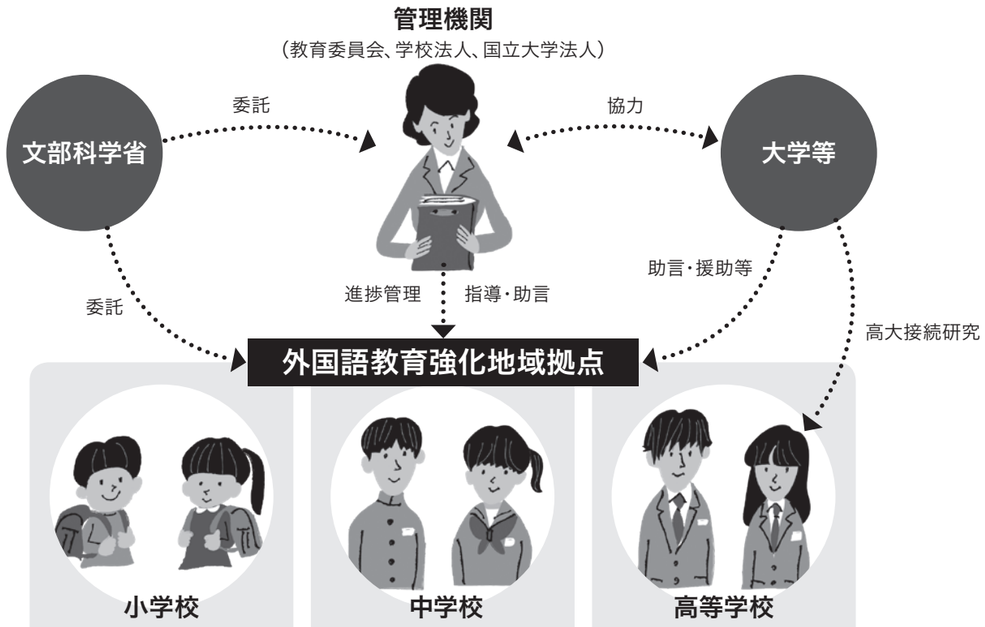
2020年度から実施される新小学校学習指導要領を見据え、文部科学省は2014年度より4年間にわたる「外国語教育強化地域拠点事業」を実施し、強化地域の拠点校による小・中・高等学校の連携を進め、先進的な取り組みを支援してきた。その成果と課題から何を学ぶべきか、そして、どのように小・中・高等学校は連携を図ればよいのか。文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育推進課の直山木綿子教科調査官と考える。

小・中・高等学校を通じた目標設定により、取り扱う内容・評価の改善をめざす

文部科学省は、2014年度から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」に基づき、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図るべく、授業改善や指導体制の整備などを順次進めてきました。「外国語教育強化地域拠点事業」はその一貫で、2014年度から4年間の指定期間を設けて、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、32の地域拠点において小・中・高を通じた学習到達目標を設定し、取り扱う内容・評価の改善をめざす、という事業でした（2017年度からは英語以外の外国語についても拠点を指定し研究開発を支援）。

各地域拠点では、研究開発学校に指定された小・中・高等学校が、新たな英語教育のあり方を見据えて、それぞれの研究課題を実践してきました。小学校では、中学年から外国語活動を開始して音声に慣れ親しみ、高学年では学習の系統性をもたせる観点から教科として研究を行いました。また、中学校では「授業は英語で行うことを基本とする」こと、高等学校では「幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高める」ことをめざして、先進的な取り組みを展開してきました。そして、地域拠点内の小・中・高等学校が連携し、学びの円滑な接続のための授業改善、小・中・高等学校で一貫した学習到達目標の設定、教員の指導力向上などに努めてきました。2020年度から実施される新小学校学習指導要領には、この事業を通じて得られた実践事例が多く反映されています。

「外国語教育強化地域拠点事業」とは？



「英語を使って何ができるようになるか」という観点から小・中・高等学校を通じた一貫した五つの領域別（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り:interaction）」「話すこと（発表:production）」「書くこと」）の目標設定を踏まえた学習到達目標の設定

小学校	中学校	高等学校
小学校3・4年生からの外国語活動（年間35単位時間）、5・6年生で教科として外国語（年間70単位時間）の実施	中学校では授業を英語で行うことを基本とし、身近な事柄について伝え合うコミュニケーションを行うなど言語活動を充実	高等学校では幅広い話題について発表（スピーチやプレゼンテーション等）、討論・議論（ディベートやディスカッション等）、交渉を行うなど言語活動の高度化

小・中・高等学校で学びを円滑に接続させるための取組

取組の成果を普及

文部科学省資料より編集部作成

学校・教育委員会・有識者の協力体制を築いて連携を図る

拠点地域では、研究開発学校それぞれの研究課題への取り組みとともに、校区内の小・中・高等学校の連携を進めました。これらを円滑に行うために重要となったのは、学校と教育委員会、大学等の有識者との協力体制の構築でした。昨年度で事業年度を終え、各地域の取り組みが報告されていますが、この協力体制がうまく機能することで、児童生徒の英語力も、学習意欲も向上したという成果が上がっています。

研究開発学校では、外国語活動担当教員や英語科教員、研究主任だけでなく、管理職の理解の下で教員が一体となって研究に取り組んできました。管理職には、現場の先生方が指導案や教材を作成し、校内研修を行い、他教科等と連携する時間を確保できるようにするための“物的な”カリキュラム・マネジメントの力が必要です。また、担当教員の負担が重くならないよう、教員一人一人の特性を見極めた校内配置をする、外部人材を活用するなどの“人的な”カリキュラム・マネジメントも必要でしょう。

そうして研究に取り組む学校に対して、定期的に学校を訪問し、研究の進捗管理を行うほか、授業づくりに対する適切な指導・助言を行うのが教育委員会の役割です。その際には、大学等の協力も仰ぎ、有識者に教員研修や授業の研究協議などにおいて、教員の授業力や指導力向上のための指導・助言を得ることもあります。また、地域内の校種を超えた連携を図り、児童生徒の学習環境を整備するうえでも、教育委員会が果たす役割は大きいと言えます。

千葉県流山市の事例に学ぶ

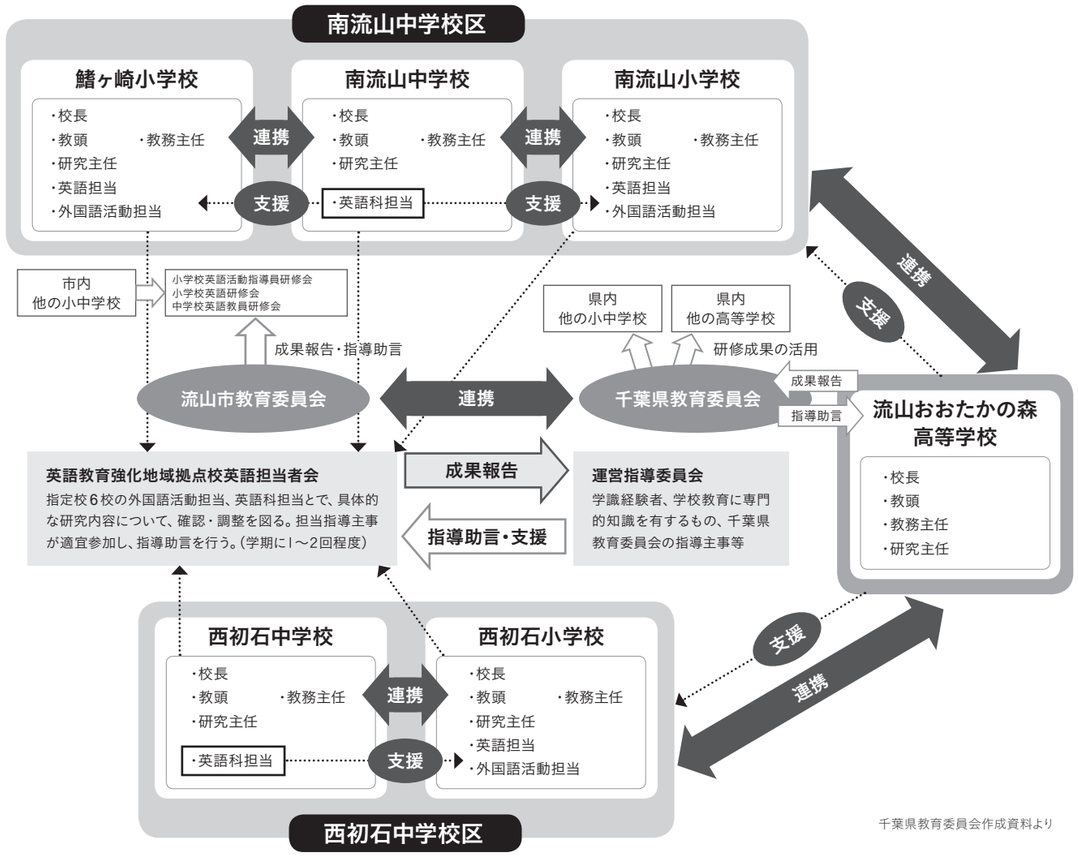
学びの系統性を大切にした小中高連携が円滑に進んだ

本誌のCLASS REPORT（P.12-17）では、学校と教育委員会、有識者の協力体制の下で、学びの系統性を大切にした小中高連携が進んだ一例として、強化地域拠点である千葉県流山市の取り組みを紹介しました。流山市は、つくばエクスプレス線の開業に伴い、都内近郊からの人口流入が急速に進んだ地域です。児童生徒数が増加し、外国人も増加していることから、市民の英語教育への関心が高まっています。市教育委員会が主導して、全市的に小中連携に力を入れており、教員の交流や合同の研究会なども積極的に進めています。

今回、研究開発学校に指定されたのは、千葉県立流山おおたかの森高等学校、流山市立南流山中学校、同市立西初石中学校、同市立南流山小学校、同市立鰭ヶ崎小学校、同市立西初石小学校の6校です。研究開発課題には「自らの意見を述べ、自国の文化や特徴を語ることのできる能力の育成を目指して、英語教育の実施学年の早期化及び教科化に基づいた小中高等学校の系統性のある教育課程及び評価方法の研究開発」を設定しました。

小学校は3、4年生の外国語活動のあり方について、『Hi, friends!』などを活用し、5、6年生では市教育委員会が作成した英語カリキュラムを使用して、英語科としての外国語指導のあり方、教材の有用性、指導方法と評価方法の研究を行いました。カリキュラムに関する研修会などには、中学校や高等学校の教員も参加し、小・中・高等学校のカリキュラムの接続を図ってきました。

中学校は小学校との継続性のある指導方法やカリキュラムを研究し、さらに流山おおたかの森高等学校と連携し、英語で行う授業のあり方やCAN-DOリストの作成と活用などを研究してきました。さらに、高校生や小学生との交流、校種を超えた教員間の交流を継続的に進め、児童生徒が英語でコミュニケーションを図る多様な機会を設定しました。



千葉県教育委員会作成資料より

市教育委員会と県教育委員会も連携して、小中高連携を進める

研究に取り組むにあたり、研究開発学校となった小・中・高等学校の連携はもちろん、小・中学校を統括する流山市教育委員会と、高等学校を統括する千葉県教育委員会も連携を図りました。流山市教育委員会は、担当課長や担当指導主事が研究開発学校の小・中学校5校と高等学校1校の学校長をはじめ、外国語活動担当や英語科担当と研究内容の確認、指導・助言を行う機会を設け、そこでの成果を千葉県教育委員会が取りまとめ、学識経験者などの有識者の協力による運営指導委員会に報告し、指導・助言や支援を受けるという体制も築かれました。

また、小・中学校、中・高等学校が合同で教員研修を行い、授業を相互に参観したり、児童生徒が授業を通じて交流したりする機会も設けられました。系統性のあるカリキュラムや学習到達目標の設定などを行うことができるのは、教育委員会の働きかけによるところが大きいと言えるでしょう。

指導主事インタビュー

校種を超えてお互いを知る それがスタートです

流山市教育委員会 学校教育部指導課　郡司 美紀 指導主事

流山市が小中高連携を進めることができたのは、校種を超えてお互いに「知る」機会を設けたことにあると思います。まずは、先生同士が集まってお互いを知る。学んだことを実践してみる。そこから始まっています。小中連携では拠点校だけでなく、市内全域の各中学校区で進んでおり、高等学校との連携は流山おおたかの森高等学校から市内の小・中学校へ呼び掛けていく体制も築かれています。また、校内研に校種を超えて参加する機会があったり、夏休み中の小学校教員研修に中学校教員が、中学校教員研修に小学校教員が参加して、中学校区ごとに話し合う場があったりと、情報交換・共有をしています。小中高連携の大切さは皆さんも感じていらっしゃると思いますが、現場の教員は日々忙しいので、なかなか自分たちでその場を設けることは物理的に難しいことも多いのが実情です。だからこそ、教育委員会が主導して場を設けることが大切だと思います。

また、小中高が連携するためには、学びの系統性をもたせることが重要です。例えば、流山市では昨年、「10年後の私」をテーマに、各校種でできることを考え、取り組みました。小学校ではビデオレターを撮影し、中学校では手紙を書き、そして高等学校では今、世界で起きている問題について、10年後の自分ならどうするかを考えて発表しました。「今の自分には募金をする程度しかできないかもしれないが、10年後は海外へボランティア活動に出る」「学校の先生になって子供たちと一緒に問題解決について考える」など、いろいろなアイデアが出ました。そのようにして学びをつなぐことで、小中高の連携が進んでいます。

題材への理解を深め 学びの系統性を意識した指導に

子供たちの思考や学習内容の系統性を大切に、真の連携を

流山市のように各地域拠点では、小・中・高等学校の交流が盛んになり、中学校の教員が小学校を定期的に訪問して授業に参画したり、高等学校の生徒が小学校や中学校で交流授業を行ったり、校種を超えて、授業を参観して研究協議を行ったりするなどの連携が進みました。小・中・高等学校の連携や学びの円滑な接続の大切さは、皆さんもご理解いただいていると思いますが、今後は全国各地で、形だけではない“真”の連携や接続が進んでほしいと願っています。そのためには、異なる校種の指導計画を把握し、授業を参観して、子供たちの思考や学習内容の系統性について考えていただきたいものです。

子供たちの学びをつなぐために重要なことは、先生ご自身が教材や教科書の題材について、どれだけ理解を深め、題材を基に内容を膨らませることができるかにあります。また、教科書の単元や言語材料について、「なぜ、この内容をこの段階で学び、この言語材料を扱うのか」「この学びが次にどのようにつながるのか」といった系統性を意識することが大切です。そのためには、先生ご自身が教科書等を深く読み込み、理解することが求められます。学びの系統性を理解し、教科書等の題材について深く理解できていなければ、指導内容に深みや厚みを出すことなどできません。新学習指導要領では、子供たちが学びを深め、自分の考えや気持ちを伝え合い、思考力、判断力、表現力を高めることを大切にしています。そのためにも、これまでのように「教科書で学ぶ」「教科書を教え込む」のではなく、「教科書から学ぶ」「教科書を入口に指導する」ということを意識していただきたいと思います。

直山 木綿子（なおやま・ゆうこ）

文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課外国語教育推進室教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官。京都市公立中学校の教諭、指導主事を経て、2009年より現職。

発達段階に応じた題材を扱い、学びをつないでいく

例えば、「食物」をトピックに、学びの系統性について考えてみましょう。小学校では3、4年生で「自分や友達の好きな食べ物」について子供同士でやり取りをします。知的好奇心の発達する5、6年生では、家庭科で学んだ栄養素と結び付けながら、「家族のためのランチメニュー」を作ってみてはいかがでしょうか。学びに深みが生まれ、相手意識も芽生え、目的意識を持って活動することができます。中学校ではフェアトレード※を題材に取り上げることができるでしょう。チョコレートの原料となるカカオの原産地はどこか、どのような人が生産しているのか。実はカカオを生産しているのは自分と同世代の子供であり、生産している子供自身はチョコレートを食べたことがないという実情もあることを理解します。そして、同世代の子供に思いをはせて自分の食生活を見直し、自分の考えを発表したり書いたりすることができるでしょう。高等学校では、教科書にある「遺伝子組み換え」をテーマにした本文を題材に、その是非についてディスカッションをすることもできるでしょう。これらの授業を行ううえでは、他教科等との連携も不可欠であり、教科等を横断して言語活動の充実を図ることができます。

このように、「食物」という共通のトピックを取り上げながらも、その発達段階に応じた活動を通じて、扱う題材の内容を理解し、子供たちが自分の考えや気持ちを伝え合うことによって、学びをつないでいくことができるのです。それには、小・中・高等学校それぞれの段階でどのような言語材料を扱い、言語活動をしているのかを互いに理解し、小・中・高等学校が一貫した形で「英語を用いて何ができるようになるのか」という観点から系統性のある学習到達目標を設定することで、どのような指導を行い、評価を行うのかということが明確になっていくでしょう。

※フェアトレードとは、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立をめざす「貿易のしくみ」のこと。

小中高が互いの授業を把握し、指導に生かすことが大切

改めてお伝えしますが、小・中・高等学校は連携して教育を行うべきであると言えます。なぜなら、子供は小学校から中学校、中学校から高等学校へと進み、その学びは一人の学びとしてつながっているからです。新学習指導要領の実施に向けた移行期間は、小・中学校では今年度からすでに始まっており、高等学校では来年度から始まります。小学校ではこの移行期間に「移行措置」の場合、外国語活動は3、4年生で年間15時間、5、6年生で現行の外国語活動の35時間に15時間を加えた年間50時間の授業実施が標準とされます。一方で「先行実施」の場合には、新学習指導要領に基づいて、3、4年生で外国語活動を35時間、5、6年生で外国語科を70時間行うことになります。そして、2020年度からは全ての小学校で、3、4年生の外国語活動35時間、5、6年生の外国語科70時間の実施となります。このように、学校や自治体によって異なる授業時数を実施するため、中学校や高等学校では毎年、経験時数の異なる生徒を受け入れていくことになります。だからこそ、中学校や高等学校の先生方は、校区の小学校ではどのような授業を行い、どのような言語材料を扱ってきたのかを把握し、系統性のある指導を行うことが、今後の授業づくりのベースとなるでしょう。

今後は学校、教育委員会、有識者などが三位一体となって、子供たちの学びの系統性を大切にした、真の意味での小・中・高等学校の連携を進めていただきたいと思います。

「外国語教育強化地域拠点事業」で連携が深まり教員や児童生徒が学び合う体制が築かれた

2014年度から文部科学省の「外国語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、また、ユネスコスクールにも加盟し、国際理解教育に重点を置く千葉県立流山おおたかの森高等学校。「グローバリゼーションの進展した社会で国際人として活躍できる人材の育成」をめざし、強化地域拠点の小・中学校の児童生徒や教員との交流を深めてきた。同校が推し進めている小中高連携の取り組みについて、田中祐之教頭と国際コミュニケーション科1年担任の玉永崚先生にお話を伺った。

指導主事が見る小中高連携の状況

千葉県 流山市教育委員会 学校教育部指導課　郡司 美紀 指導主事

小中高連携を図るには、校種間の垣根を取り払うことから始めなければなりません。2014年度に「外国語教育強化地域拠点事業」が始まってすぐに、流山おおたかの森高等学校から「本校を会議の会場に使ってください」「授業を参観しに来ませんか」等と声を掛けていただきました。それまで、小・中学校の教員が高等学校の校舎に入ることが少なかった状況のなかで、こうした高等学校のウェルカムな姿勢が連携を進めたと言っても過言ではありません。

「知らない」ということは、連携をするにあたり壁になることもあります。小・中・高等学校が常にオープンな姿勢で互いを知り、つながりを絶やさないことが小中高連携の秘訣です。ともに考え、実践を共有し、情報交換する場は必要不可欠です。その観点から相互の働き掛けを密にさせ、連携を促進させるうえで、教育委員会の担う役割は非常に大きいと感じています。

自ら考え、意見をもち、伝え合うことを大切に

流山おおたかの森高等学校では生徒の学力向上や思考力を高めるため、「社会的な話題について、自ら考え、意見をもち、伝え合うこと」を大切にしている。その具体例として、田中教頭は「2年生の家庭科、3年生の社会科などではグループ・ワークを取り入れています。また、防災講習の際には、『もし今、地震が起きたらどのように行動するか?』と生徒同士で相談させて考えさせる機会をつくりました」と説明した。知識や技能を活用して思考力・判断力・表現力を高め、自ら主体的に学ぼうとする姿勢を育んでいるのだ。

「外国語教育強化地域拠点事業」の研究では、初年度の「伝える力の育成」から、2年目は「伝え合う力の育成」、3年目は「論じ合う力の育成」へと年次目標を段階的に発展させてきた。そして、授業で話し合うテーマも日常的な話題から社会的な話題へと深みを増しながら、生徒の論理的思考力や批判的思考力、表現力を育んできた。授業は教科書を題材に、ペアで情報や考えを伝え合う活動を多く取り入れ、生徒の言語活動を充実させている。

同校には普通科と国際コミュニケーション科が設置されており、なかでも国際コミュニケーション科には、英語が好き、英語が得意だと感じている生徒が多い。玉永先生によると、授業中には、間違いを恐れずに自らの考えや思いを伝え合い、相手の意見に耳を傾け、さらに思考を深めていく活動に意欲的に取り組む姿勢が見受けられるという。また、生徒たちは、拠点事業の一環として実施している流山市内の小学校での出前授業「高校生が先生」にも積極的に参加している。

小学校への出前授業で生徒と児童が交流

出前授業「高校生が先生」は、同校の英語科教員とALT、国際コミュニケーション科の生徒が流山市内の小学校を訪れ、小学生と一緒に英語活動を行うものだ。同校の生徒たちにとっては、コミュニケーション能力を実践的に養う場であり、小学生にとっても、英語を使ってやり取りする意欲を高める場となっている。これまで、高校生が店員役となり、小学生がカレーの材料を買いに行くといったロールプレイ形式の授業を行ってきた。

そして昨年度はプログラムを一新し、「世界旅行に出かけよう!」をテーマに、同校の生徒が15カ国のブースに分かれて各国を紹介し、小学生が世界地図を手に世界旅行をするという活動を行った（下写真）。まず、高校生2人と小学生5人のグループに分かれ、高校生が15の国の名前をどのように英語で呼ぶかを教え、みんなで練習してから活動を開始。小学生は用意された15カ国のブースを自由に訪ねて、高校生からその国について英語で説明を聞き、質問に答えると、各自が持っている世界地図にオリジナルスタンプを押してもらえる。こうして小学生は自由にブースを回りながらスタンプを集めて世界旅行を体験し、高校生との交流を深めた。

このプログラムを実施するにあたっては、流山市教育委員会の協力のもと、隣接する同市立西初石小学校と打ち合わせの場を設けて、企画を練り上げた。小学校では、『Hi, friends! 2』（文部科学省）のLesson 5「Let's go to Italy」で“Where do you want to go?”の表現などに慣れ親しんでいる。そこで、実際にそれらの表現を使ってコミュニケーション活動をし、世界の国々への興味を引き出すことにつながる場としたいといった小学校の要望に応じて、出前授業を行うことになったのだ。

小中高連携を円滑に進めるために

このような連携を進めるにあたっては、小・中・高等学校が系統性を大切にした教育課程を開発することが求められる。そこで、流山市教育委員会は英語教育強化地域拠点校英語担当者会を年5回開催し、流山おおたかの森高等学校を含む拠点校6校の英語科教員および外国語活動担当教員が集まって話し合い、それぞれの段階で扱う表現や言語材料などの理解を深めるとともに、指導主事が指導助言を行う場を設けてきた。また、校種を超えて互いに授業を公開し、系統性をもった指導のあり方などについて研究協議を重ねてきた。

「小中高連携を今後も継続していきたい」と田中教頭。

さらに、同校の英語科教員が市内の中学生を対象に高等学校の英語の体験授業を行うほか、毎年、同校で中学生対象英語スピーチコンテストを開催し、生徒が司会進行役を務め、コンテストに参加する中学生を前にスピーチを披露するなど、小中高連携を牽引する役割を担ってきた。

「外国語教育強化地域拠点事業」による4年間の研究を通じて、同校では流山市内の小・中学校との連携が深まった。田中教頭は「流山市教育委員会の多大な協力により、これまで築いてきた拠点校間や市内の小・中学校との関係性を大切にしながら、今後も小中高連携を進めていきたい」と強調する。また、玉永先生は「生徒たちは、いろいろな人と話し、コミュニケーションを取ることを好んでいます。地域での活動や小学校の外国語活動の補助をする出前授業などにも積極的に参加してくれます。人との関わりのなかで、相手を思いやり、受け入れることはコミュニケーションの基本であり、これは異文化理解にもつながっていくと思います。誰かのために自ら進んで行動できる人に育ってほしいと願っています」と話した。

間違いを怖れずに英語でコミュニケーションを取ろうとする意欲が高い同校の生徒たち。

出前授業「世界旅行に出かけよう!」の様子

「外国語教育強化地域拠点事業」の一環として、隣接する流山市立西初石小学校にて、国際コミュニケーション科の生徒による出前授業「高校生が先生」を行った。

高校生2人と小学生5人のグループに分かれて、まずは15カ国の国名を英語で練習。高校生のリードで小学生たちが英語で続いた。

高校生たちが国別のブースを用意し、小学生たちは世界地図を手に各国ブースを回る。高校生からその国の説明を聞き、英語でやり取りをする。

Pick Up! 授業

間違いを恐れずに、英語でコミュニケーションをする意欲を育む

国際コミュニケーション科1年「総合英語Ⅰ」

【教材名】『LANDMARK Fit Ⅰ』（啓林館）/ Lesson 4「Gorillas and Humans」（全8時間中2時間目）

玉永先生が受けもつ国際コミュニケーション科1年生の「総合英語Ⅰ」の授業を訪ねた。単元の導入段階であるこの日は、教科書本文の内容理解を中心とした授業だった。英語学習に対して意欲的な生徒が多い国際コミュニケーション科では、積極的に活動に参加し、間違いを恐れずに英語を使って自分の考えや思いを伝え合おうとする姿が見受けられる。

授業はペアでの活動を中心に進められる。冒頭の2-minute monologueは毎回の帯活動で、提示されたトピックに対する自らの考えを、「主張〜理由〜根拠〜結論」と論理立てて、1人2分間ずつペアで話す。論理的な思考力を育み、表現力を養うための活動だ。

教科書を読み進める際にも、本文をまず各自で読んだあと、ペアで自分が読み取った内容について話し合って確認する。その際には、なぜそのように考えたのかを理由を添えて、相手に分かりやすく説明できるようにする。玉永先生が読み上げた文を聞き取り、その正誤を判定したり、聞き取った内容を書き取ったりと、4技能を統合した活動が取り入れられている。

今後、本文の内容理解が進んだのちには、単元の題材である「絶滅危惧種」についての調べ学習を進め、プレゼンテーションを行うことが予定されている。国際コミュニケーション科の専門科目「総合英語」は週5時間の時数があるため、普通科の週3時間の「コミュニケーション英語」に対して、発表活動に充てる時間を多めに取ることができる。そのため玉永先生は、「生徒が課題について調べ学習を進め、英語でポスターセッションやディベートに取り組みながら、思考を深め、表現力を高められる授業づくりを意識しています」と話した。

自ら考え、友達と意見を交換しながら学びを深めていく技能統合型の授業づくり

流山市立南流山中学校の平井利明先生は、生徒の思考を伴う言語活動を通じて、主体的・対話的で深い学びを実践している。小学校で培われた「臆せずに英語を使おうとする姿勢」を大切に伸ばし、高等学校で求められる高度な言語活動へとつながる英語力、コミュニケーション能力を見据えた授業づくりをどのように行っているのか。3年生の授業を訪ね、英語を使って自分の考えや思いを伝え合う生徒たちの姿を取材した。

教科調査官が見る平井先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課　直山 木綿子 教科調査官

授業を通して一番印象に残ることは、平井先生が終始英語を使っていることです。指導者が授業を英語で進めることによって、生徒に英語を聞く機会を提供し、生徒が英語を使うよう促すことにもなります。また、教科書等の内容を題材に生徒とやり取りをする言語活動を仕組めば、授業は自然と英語で進めることになります。現に、教科書の内容に関する質問についてグループで答えを考える際に、単語レベルではあっても、生徒たちは英語を使って表現しようとしています。それは、生徒が意見や考えを発表したら、平井先生が必ず “This is your idea. Very good.” などと受け止め、発表したことを称賛しているからこそ、そのような態度が育っているのでしょう。平井先生は、生徒に “Don't be afraid of making mistakes.” と何度か声を掛けています。初めから完璧、十分にというわけにはいきません。まずは、このような意識を指導者が持ち、生徒の英語を使う抵抗感をできるだけ取り除きたいものです。

【本時の目標】
・まとまりのある長文を読んで理解する
・生徒同士、英語で質問し合い、意見交換をする
・自分の意見を英語で発表する

【教材名】
『SUNSHINE ENGLISH COURSE 3』（開隆堂）
Program 4「Faithful Elephants」
全6時間中1時間目

※期末短縮日課

0min　1　2　3　4　5　6　7　45min

平井先生の授業の様子はこちら

1. あいさつ

始業前、生徒1人が教壇に立ち、教科書の音読をリードする。チャイムが鳴ると、先生の掛け声とともに全員でスローガンを大きな声で言い、英語を話す空気が生まれた。続いて、曜日、月日、時間、天気を確認し、授業が始まる。

2. 帯活動① 歌

映画『レ・ミゼラブル』の映像を流しながら、「Do You Hear the People Sing?」を歌う。歌詞の英語字幕には、強弱を注意すべき箇所が違う色で表示され、歌の盛り上がりに合わせた平井先生の “Come on!” の呼び掛けに、歌声も次第に大きくなった。

3. 帯活動② 1-minute talk

“How was your weekend?” をトピックにやり取りをする。アイコンタクトやリアクションに留意してペアを代えて3回活動し、1組のペアが発表。平井先生は、生徒が話したかき氷について、英語では shaved iceであると紹介した。

4. リスニングと黙読

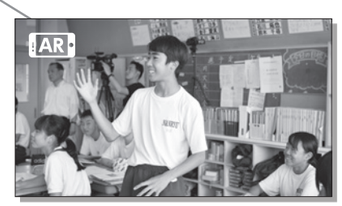
本文を読む前に、上野動物園にある慰霊碑の写真を提示する。平井先生は生徒たちに、写真に写っているものが何か、どこにあるのかと問い掛け、生徒に考えさせる。生徒たちは初見の英文となる教科書本文を音声で聞きながら、文字を目で追い、黙読する。

5. グループワーク①

この日のメインアクティビティはグループでの意見交換。3、4人一組のグループで、ワークシートに記された5つの質問について、本文から読み取った自分の考えを互いに述べ、意見交換をするようにと、平井先生が説明した。

6. グループワーク②

各グループで、質問の答えを本文から探し出し、自分の言葉で意見を言い合う。本文を読めばすぐに答えが分かる質問から、自分なりの考えが必要な質問まで、生徒同士で考え、話し合い、平井先生の問い掛けに答えながら理解を深めていく。



7. 発表（まとめ）

グループで話し合った内容を全体に発表する。平井先生は “Don’t be afraid of making mistakes.” と勇気づけ、発言した生徒を “Thank you. Please give him a big hand!” “That’s very interesting!” などと褒め、全員で拍手して称賛した。

思考力を育む主体的・対話的で深い学び

「夏休み中には原爆の日や終戦記念日があるため、生徒たちには戦争と平和について考える機会をつくりたい」と、平井先生は夏休みを直前に控えた時期に、この単元を扱った。小学生の時に一度は触れたことがあるかもしれない『かわいそうなぞう』の物語だが、生徒が英文で読むのは初めてのこと。授業は、音声を聞きながら本文を目で追って大まかに意味を捉え、ワークシートの質問に対する答えを考え、友達と話し合うことで内容理解を深め、最後に意見を発表するという流れで進んだ。技能統合型の活動を取り入れた、まさに「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業だ。

平井先生の授業では、普段から生徒同士で話し合う活動を取り入れている。「英語が苦手でもがんばって発言しようとする生徒が多い」と言うが、それは平井先生が生徒に間違いを恐れずに英語を使おうとする意識をもたせるような声掛けをしていることが大きく影響している。「私たちが日本語を使いながら身に付けてきたように、英語も言葉であり、使わなければ身に付きません。授業中に成功体験を積み重ね、自ら英語を使おうとする気持ちを育みたいと思っています」と平井先生は話す。そして話し手は、聞き手に向けて笑顔を見せながら目を見て話し、聞き手は、相手の目を見て聞き、相づちを打つなどの反応をするといった、「相手を意識して、気持ちを大切にしたやり取り」をしてほしいと指導している。このような指導が生徒の「話そう」「聞こう」とする意欲を高めており、実際に修学旅行の際には、街を歩く外国人観光客に積極的に話し掛け、コミュニケーションを図ろうとする生徒の姿が見受けられたそうだ。

小中高連携で育む生徒たちの力

平井先生によれば、生徒たちが臆せずに英語を話そうとする態度は、連携している南流山小学校や鰭ヶ崎小学校での外国語活動を通じて培われてきたものだという。「小学校の先生方が、子供たちに音声でのやり取りを大切に指導してくださっているので、中学に入学してきた時点で、使える表現の幅がだいぶ広いと感じています」。そのように小学校で培われてきた英語の学習意欲やコミュニケーションへの意欲を、中学校でどのように伸ばし、そして、高等学校での高度な言語活動で求められる英語力へ引き上げていくか。平井先生は中学校に求められる役割の重要性を感じている。

授業では帯活動の1-minute talkは、即興的なやり取りの力を伸ばすために取り入れているが、今後は、即興力を高めて、ディベートにも取り組んでいきたいという。「流山おおたかの森高等学校の授業を見せていただく機会がよくありますが、社会的な話題に関するディベートなどにも取り組み、授業で培った力をパフォーマンステストで評価しています。本校でもCAN-DOリストに基づき、目標と指導、評価の一体化を進めていますが、高等学校でどのような目標をもち、指導を行い、評価をしているのかを知ることは、中学校での指導を考えるうえで大いに参考になります」と平井先生は語る。

英語を使って物事を考えられる人を育てる

生徒が自分の考えや気持ちを、英語で述べる力を付けるために、授業ではできる限り、生徒が英語を使う時間を多く確保し、身近な話題から社会的な話題まで、思考を深める活動を取り入れている。「これからの日本を背負っていく子供たちには、答えも前例もない問いに対して、ゼロから行動を起こし、結果を残す力が求められます。だからこそ生徒たちには、英語を学ぶ人ではなく、英語を使って物事を考えられる人に育ってほしいと思います」と述べた。

教員、学校長、教育委員会が一体となり取り組む 目の前の子供たちの実態に合う授業づくり

外国語教育強化地域拠点校として、外国語活動・外国語の研究に取り組んできた流山市立南流山小学校。4年前、教材も指導案も何もないところから手探りで始めた外国語活動・外国語の授業は、濱崎祐子校長のリーダーシップの下で、英語活動指導員やALTの協力を得ながら、教員全員が共通理解をし、足並みを揃えてつくり上げてきた。5年生の学級担任の野口祥奈先生が、英語活動指導員の小林純子（Junko）先生とティーム・ティーチングで進める授業を訪ね、子供たちの主体的にコミュニケーションを図ろうとする姿を取材した。

教科調査官が見る野口先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課　直山 木綿子 教科調査官

授業では、こんなにも英語を使って楽しそうに話す子供たちがいるのだろうかと思うほど、児童は相手を何度も代えて、将来就きたい職業とその職業に就くために考えた一日の時間割について伝え合っています。ペアでのやり取りでは、自然と笑顔がこぼれ、驚きの表情、ジェスチャーがあり、相手の言葉を繰り返して確認をしたり、“That's OK. ”とねぎらったりしています。子供たちが使っている英語は、“What do you want to be? ” “I want to be ... I have ... Do you like ...?” などと簡単なものですが、これらを使って子供たちはうまく伝えるためのポイントや、相手が話しやすくするためのポイントを試し、相手を代えて何度も繰り返すうちに、伝えるためのポイントを明確にしています。そしてそれを支えていたのが、学級担任の学級経営力と、英語活動指導員との役割分担です。相手を何度も代えることが無駄な動きなくでき、指導者の指示が通ること、学級担任が活動をコントロールし、英語活動指導員が児童に使わせたい表現等をうまく提示しています。

【本時の目標】

・上手に伝えるポイントを意識し、オリジナルの時間割を伝えることができる

・友だちのオリジナルの時間割を聞いて、リアクションをしたり、質問したりできる

【教材名】

新学習指導要領対応小学校外国語教材『We Can! 1』
Unit 3「What do you have on Monday?」
全6時間中6時間目

0min　　45min

1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8

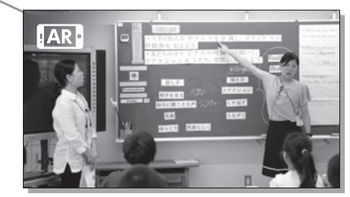
野口先生の授業の様子はこちら

1. あいさつ ～Let's Chant♪

あいさつに続いて、天気、曜日、月日の表現を確認。既習表現の復習として、全員で“What do you want to be?”や“What do you have on Monday?”のチャンツに取り組む。

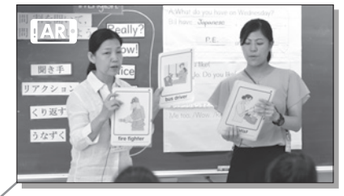
2. Small Talk

野口先生とJunko先生が悪い見本を実演。子供たちに、話し手と聞き手がどうしたらよいかを考えさせるため、話すときのポイントやリアクションの言葉を確認する。



3. Today's Goal

本時の目標を提示し、振り返りカードの4線に名前を記入する。全員で目標を声に出して読み上げる。どのような活動を行い、話し手と聞き手はそれぞれどのような点に注意して活動するかを理解した。



4. Review

職業を表す英語の絵カードを見ながら、“I want to be a ...”の表現を使って、将来就きたい職業の言い方を復習。壁に掲示してある教科名の英語と“I have ...”の表現も復習した。

5. Practice

野口先生と子供たちでやり取りの練習をする。聞き手が“What do you want to be?” “What do you have on Wednesday?” “Do you like ...?”と質問し、話し手は自分の思いを答える。

6. C.A.（Communication Activity）

ペアでやり取りをする。“Me, too.” “Really?” などのリアクションも入れながら、できるだけ長く会話を続ける。ペアを代えて活動し、途中で良いやり取りをしているペアに発表してもらい、再び活動した。

7. 振り返り①

何人もの友達とペアでやり取りをしてみて、どの友達が良い受け答えをしてくれたかを発表し合う。「Really? などと反応してくれた」「笑顔で返してくれた」など、お互いの良さを認め合った。

8. 振り返り②～あいさつ

「伝えるポイントを意識できたか」「友達に質問やリアクションができたか」などを、振り返りカードに記入。Junko's Quizでは先生のやり取りを聞き、当てはまる職業や教科に○を付けた。

主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育成するために

本時ではUnit 3の最終時として、C.A.(Communication Activity)でペアでのやり取りに初めてチャレンジした。1学期は児童1人が前に出て話し、ほかの児童はその発表を聞いて、自分の気持ちをリアクションワードを使って応答する1対多の活動でやり取りをしてきた。その経験をペアでのやり取りに発展させ、自分の考えや気持ちを相手に伝える楽しさを味わい、既習表現の“Do you like ...?”も使うことで、会話をできるだけ長く続ける活動だった。ペアでやり取りをしている間、野口先生とJunko先生は子供たちの様子を机間指導をして見取り、一人一人の聞く力を評価していた。

昨年度で「外国語教育強化地域拠点事業」の研究年度は終えたが、南流山小学校では研究を継続しており、今年度は「主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成～言語活動の充実（Small TalkやC.A.など）と評価の在り方を通して～」を研究課題としている。1～4年生が外国語活動、5、6年生が外国語科として授業を行い、評価も研究課題の1つとした。毎回の授業では、聞くこと・話すことについては活動から見取り評価をするほか、各自の振り返りカードから、目標に対して、子供たちが「何ができるようになったのか」「何が不足しているのか」「何を伸ばす必要があるのか」といった実態を把握する。また、Junko's Quizを通して、その日のめあてを達成することができたかを確認し、聞くことの評価に組み入れている。さらに、話すことの評価として、学級担任と英語活動指導員、ALTの3人とやり取りをするパフォーマンステストも行う。その際にはあらかじめ設定した評価基準に沿って、共通理解のもとで評価する。

教育委員会や中学校と連携し、教員全員で取り組んできた

子供たちがやり取りをする際に大切にしていることは、目の前にいる相手の気持ちに配慮して、自分の考えや思いを話すことだ。「伝えたい気持ちや考えがなければ、コミュニケーションは成立しません。まずは、気持ちや考えを育んでいくことが大切だと思います」と話す野口先生。子供たちには、教室は間違えていいところだと4月から伝え、分からないことを恐れずに質問することができる空気をつくることを大切にしているという。「私自身も英語でどう言えばいいのか分からないこともあります。そのようなときには、Junko先生が私の言いたいことをくみ取って、英語で表現してくださるので、安心して授業を進めることができます。子供たちにも『Junko先生に聞いてみよう！』と呼び掛けることもあります」と述べた。

英語活動指導員は、学級担任主導の授業を展開するうえで心強い存在だ。授業案を練り、指導計画を立て、評価基準を考える際にも必ず、Junko先生を交えて学年の先生全員で検討する。また、濱崎校長は管理職のリーダーシップの重要性を感じており、「先生方が分からないこと、やりたいことを共有し、目の前の子供たちの実態に合わせた授業をつくっていきましょう」と先生方を勇気づけ、流山市教育委員会の郡司美紀指導主事と連携しながら、学級担任が安心して挑戦できる環境をつくってきた。

また、市教育委員会が主催する小中合同研修会で、同じ中学校区の南流山中学校や鰭ヶ崎小学校の教員同士が、お互いの授業や子供たちの実態を話す機会を持てたことも研究を進めるうえでは大いに参考となったという。研究主任の三浦侑里子先生は「教員は常に学び続ける姿勢をもつことが大切だと思います。小学校の教員は英語が専門ではないので不安はもちろんあります。しかし、私たちは教員みんなで一緒に学ぼう、教わろうという気持ちで取り組んできました。今後も中学校と連携しながら、小中9年間で目の前の子供たちの実態に見合う授業づくりについて考えていきます」と話した。

〔連載〕

中学校・高等学校の

授業改善と評価のあり方

第3回 定期考査とパフォーマンステスト

―妥当性・信頼性のある評価のために―

百瀬 美帆（ももせ・みほ）

明海大学教職課程准教授。千葉県内の公立高等学校で、長年にわたり4技能を育む英語授業、国際交流プログラム等を先導・推進してきた経験や県内の教員研修講師等の経験をもつ。2017年4月より現職。『レクシス英和辞典』（旺文社）、外国語教科書『empathy oral communication I・II』（教育出版）などの執筆のほか、文部科学省作成『Broaden Your Horixons with English! - 英語を使って羽ばたく日本人 -』DVD添付用ワークシート作成に携わる。

授業と評価の改善は表裏一体

多くの中学校、高等学校において、定期考査問題や成績評価の方法は学年内で同一であることと思いますが、指導方法が担当者ごとに異なってはいないでしょうか。実際に、次のような先生方の悩みを耳にすることがよくあります。

- 4技能統合型の授業を行っているが、定期考査で問われるのは『読むこと』『書くこと』の技能の一部、あるいは語彙や文法の知識のみである
- 自分のクラスだけパフォーマンステストを行っても、成績評価にはつながらない
- 自分の授業は生徒のコミュニケーション活動を中心としてほぼ英語で行い、教科書本文の和訳はしない。しかし、ほかの先生が作成する定期考査問題には和訳が多く出題されるので、テスト前にはその対策をしなければならない

残念ながら、これでは「指導と評価の一体化」を実現することができません。

授業改善が個人レベルで進み、生徒たちが習得した「知識及び技能」を有機的に使って「思考し、判断し、表現する」力を身に付け、広く世界とつながろうとする「学びに向かう」態度が育成されたとしても、その学習の成果がまったく的外れな物差しで測られている現実が、まだあるようです。「1人の10歩より、10人が1歩踏み出す」ことこそ、評価の妥当性につながります。つまり、“授業改善と評価改善は表裏一体”なのです。

内規の見直し

このような問題点を解決するためには、もちろん教科内での共通理解をもって授業改善を進めることが重要ですが、併せて「評価に関する校内の規定」を検討する必要があります。

『高等学校における学習の評価の実態把握と改善に関する研究』（2011年3月国立教育政策研究所）によると、「評価（評定）に関する校内の規定の設定の有無」については、公立高校、私立高校全体で96.4%が評価に関する内規を設けています【図1】。

例えば、千葉県立長生高等学校では2013年度に英語の評価について内規の一部を改訂し、それまでの「定期考査評価80%＋授業における評価20%」から「定期考査評価40%＋実技評価40%＋授業における評価20%」としました。この見直しにより、主に「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を定期考査時にリスニングテストと筆記テストで評価し、「聞くこと」「話すこと」「書くこと」については、別の日程でパフォーマンステストを行い、評価するようになりました。

【図1】評価に関する内規を設けていますか

	設けている	設けていない	合計
公立	248	8	256
	96.9%	3.1%	100.0%
私立	102	5	107
	95.3%	4.7%	100.0%
合計	350	13	363
	96.4%	3.6%	100.0%

生きて働く知識及び技能の習得を問う

新学習指導要領では「何ができるようになるか」を明確にすることが求められます。定期考査の筆記テストでは、生徒が「（指導された）知識及び技能をどの程度習得したか」を測ることになりますが、試験範囲とされた教科書の英文をそのまま問題文として出題し、その本文についての「空所補充問題」「語句の整序問題」「正しい語形を問う問題」では、生徒の暗記力を測るテストとなる可能性があります。しかし、新学習指導要領で求められているのは、教科書の題材の内容と関連付けて指導された知識及び技能を、初めて出合う文脈や場面でも活用することができるかを問う、すなわち「生きて働く知識及び技能が習得されたか」を測ることなのです。

例えば、授業で教科書の題材を読み、パラグラフごとに概要を把握して要約する技能を指導したならば、定期考査では生徒にとって初見となる英文を問題文とし、その要約を選択肢から選ぶような問題を作成することができます。その際には、授業で扱った題材と内容や背景となる情報に関連性がある文章で、かつ語彙や表現の難易度が教科書と同等のものを選ぶようにします。毎回の授業において、「～できるようになる」ことをゴールに生徒が学び、活動し、定期考査では「どのくらいできるようになったか」という到達度が測られることにより、生徒の学びへの意欲を刺激するような考査問題を作成したいものです。

パフォーマンステストで測る力

授業ではさまざまなスピーキング活動が行われています。新学習指導要領では「話すこと」を［発表］と［やり取り］に分けています。

［発表］の活動でまず思い浮かぶのは、Reading Aloud、Recitation、Self-introduction、Show & Tell、Presentation、Speechなどでしょう。いずれの場合も、授業において教師が活動を通して技能を指導し、生徒に練習の機会と適切なフィードバックを与え、技能が習得されるようにします。それぞれの技能には裏付けとなる知識があり、その「知識及び技能」を実際の場面でどのように活用するのか、という「思考力、判断力、表現力」が必要であることを、生徒が経験を通して学べるような指導の工夫が求められます。

例えば、音読は単なる文字の音声化ではなく、「情報を音声で伝達することができるようになる」という到達目標を示して指導します。生徒自身がこの目標に到達するためには、文意を理解した区切り方や聞き手が理解できる発音が必要だと認識して練習し、パフォーマンステストにおいては、その技能がどの程度習得されたかを評価します。

同時に、［発表］には聞き手がいることを生徒に意識させます。聞き手としての到達目標として、話し手がより話しやすくなるような聞き手の態度や、同意や疑問を示す表現を指導し、活動中に観察評価とフィードバックを繰り返して「積極的にコミュニケーションに取り組む態度」を養います。インタビュー形式のパフォーマンステストでは、インタビュアー（試験官）の発言に対して適切に応答することができるかどうかを評価することもできます。

ディベートやディスカッションの評価

このように［発表］と［やり取り］は明確に切り離すことはできませんが、［やり取り］により重きをおいた活動として、ディベートやディスカッションがあります。こうした高度な［やり取り］においては、「知識及び技能」に加え「思考力、判断力、表現力」がますます必要となります。活動の到達目標は生徒にも分かりやすい表現で示し、この到達目標の記述をそのまま評価基準として用いることができます。

例えば、ディベートを段階的に指導する場合、「論理的な理由付けができる」ことを到達目標とした指導のあと、パフォーマンステストでは、インタビュアーが“I think our school should abolish the school uniform. Do you agree or disagree?” “Why?” と質問して、生徒が論理的な理由を付けて自分の意見を言えたかどうかを評価することができます。また、「聞き取れなかったり、理解することができなかったりした情報について、質問することができるか」を評価するために、インタビュアーが意見を述べて生徒が質問する形式など、指導に応じたパフォーマンステストを作成することができます。

ディスカッションの評価では、ある問題についての意見を試験官が読み上げ、生徒は異なる立場でディスカッションに参加している複数の登場人物から1名を選び、その立場から意見を述べるような形式のテストが考えられます。評価では発音や表現などの正確さよりも、「選んだ人物の立場から論理的に意見を構築することができるか」を評価することが大切です。

パフォーマンステストの出来栄えをその場で評価することが難しければ、録画して評価することも可能です。その場合には複数教員での評価が可能となるので、評価の信頼性を高めることができます。また、記録した動画を使って、教員同士で評価についての研修をすることもできますので、生徒の負担にならない位置に固定カメラを設置してパフォーマンステストを録画することをお勧めします。

定期考査もパフォーマンステストも、「指導と評価の一体化」なくしては考えられません。改めて、学習指導要領に即した学習到達目標の設定、そこから単元計画、授業計画をたてることの重要性をご理解いただきたいと思います。

次回は「自律的学習者を育てる授業の工夫」について考えます。

〔連載〕

小学校外国語活動・外国語科の

授業で使える「評価」のためのアイデア

第３回：各時の目標設定と評価を関連付ける

前回ご紹介した「CAN-DOリストを用いたポートフォリオ形式の評価例」は、学習開始時に児童と指導者で共有した到達目標に照らし合わせ、単元ごと、あるいは学期に数回の頻度で学びを振り返るものです。これに加え、毎回の授業でも、目標設定とそれに合わせた評価を行うことにより、児童の「積極的に自ら学ぼうとする力」を引き出すことをめざしましょう。

評価を視野に、各時の目標を段階的に設定する

毎回の授業における評価を適切に行うためには、「その授業でめざすこと」が児童に明確に伝わる目標設定が必要です。一例として、移行期間に６学年で扱う内容にもなっている『We Can! 2』より Unit 7「My Best Memory」を取り上げます。この単元は、Unit 5「My Summer Vacation」で導入された過去を表す表現を、小学校生活の思い出というトピックで改めて扱うもので、以下の単元目標が設定されています。

- 学校行事について，聞いたり言ったりすることができる。（知識及び技能）
- 学校行事について伝え合ったり，例を参考に語順を意識しながら書いたりする。（思考力，判断力，表現力等）
- 他者に配慮しながら，思い出の学校行事について伝え合おうとする。（学びに向かう力，人間性等）

以下は、文部科学省が作成した全８時間の学習指導案例から、各時の目標と「話すこと」の主な言語活動を抜き出したものです（下線は筆者による）。第１時と第２時は本単元の言語材料を用いた基礎的なコミュニケーションとして「知識及び技能」を、第３時から「思考力、判断力、表現力等」を踏まえた活動へと移っていることが分かります。さらに、下線部から読み取れるように、各授業の目標を「段階的な資質・能力の育成」をめざすものとすることにより、「指導と評価の視点をどこに置くか」が明確になっています。

第１時：
「学校行事についての話を聞いて内容が分かる」ことを目標とし、Small Talkにより既習の過去を表す表現I enjoyed ～.の復習、学校行事に関する話の聞き取り、ポインティングゲームなどで学校行事を表す英語表現に慣れ親しむ。

第２時：
「思い出に残る学校行事とその理由を理解したり，思い出の行事について尋ねたり，答えたりできる」という目標に向けて、「What's your best memory?」、「My best memory is sports day. How about you? What's your best memory?」のような基礎的な対話を行う。

第３時：
「学校行事についての話を聞いて内容が分かり、感想を伝え合う」という目標を受け、「What's your best memory?」、「My best memory is the school trip. It was exciting. What's your best memory?」のように（第２時と同じく）思い出の学校行事を言うだけでなく、その時の気持ち（感想）を添えて伝え合いができることを目指す。

第４時以降：
さらに「楽しんだこと（I enjoyed ～(ing).）」、「行った場所（I went to ～.）」、「食べたもの（I ate ～.）」、「見たもの（I saw ～.）」など、これまでUnit 5でも聞いたり言ったりしてきた表現を取り入れて、豊かな対話を行う力を少しずつ高めていく。

授業中の目標提示にもひと工夫

段階的な目標設定を生かすために、本時の目標を児童と共有する際には、「前時までにできるようになったことと何が異なるのか」に気付かせるようにします。授業の初めに「Today's goal is ...」と言いながら目標を示し、続いてすぐに語句の導入に移る授業を見ることがありますが、これでは児童がこれらの語句を何のために学んでいるのかをなかなか理解できません。目標を伝えたら、モデル対話などで「目標が表す児童の姿」を具体的に示す、すなわち「今日はあんなふうに自分でも話せるようになるんだな」と児童に期待させることが大切です。そのための工夫として、最初に指導者によるモデル対話を見せてから「What's today's goal?」と児童に尋ね、目標を考えさせることもできます。「今日新たに取り組むこと」を意識させることで、児童が自律的、積極的に学習活動に取り組むよう促します。

各時の目標に合わせたパフォーマンスを楽しく評価してみる

児童と共有した「本時でめざす姿」に照らし合わせたパフォーマンスの見取りとして、授業時間内に指導者と児童との簡単な「やり取り」の様子を記録する活動を始めてみてはいかがでしょうか。ワークシートを使った表現の書き写しや、振り返りシート記入の間に、担任やALTが教室を回り、授業の初めにモデルとして示した対話を児童と１対１で行います。担任とALTがクラスを半分に分けて交互に担当することにより、担任とも、ALTとも英語で対話したという経験、達成感を積ませます。「尋ね合い」の活動の場合、常に担任やALTが先に質問をして児童が答えるのではなく、児童に「今日は自分が先に質問をする」ことを選ばせてみるのも楽しいですし、自信の度合いが現れることから、態度の見取りにもつながります。

評価は補助簿などに簡潔に書き留めます。P. 20で示した『We Can! 2』Unit 7の第３時で行う「思い出の学校行事とその感想を伝える」言語活動における児童の様子についてA・B・Cの３段階で記録する場合、一例として、まず「ターゲットの表現を用いて伝えることができた」ならば「目標をとりあえず達成」（B）とします。それ以上のパフォーマンスとして、「相手への配慮がうかがえた」（A1）、「既習表現を使ってさらに情報を加えた」（A2）なども評価し、逆に「目標とする対話の一部しか行うことができない」（C1）、「まだ指導者の助けが必要である」（C2）のように今後の指導で配慮していきたいことも細分化して書き留めておきます。児童にはあらかじめ、下表のように「どのようなパフォーマンスがどのように記録（評価）されるのか」を、具体例を見せながら説明しておきます。

この活動は、１度きりのテストではなく、何回もの授業を通して行うことで「継続的な評価」の１つとなるものです。児童が毎時間、ちょっとした腕試し感覚で取り組むことができるよう、楽しい雰囲気で行います。指導者も、評価の記録だけに一生懸命になり過ぎず、対話のあとには児童を褒め、「次はどうすればもっと良くなるか」を伝えるフィードバックを欠かさないことが大切です。

評価は児童が今の自身の到達状況を把握し、改めて今後の学習への見通しをもつために行うものです。目標が児童にとっても指導者にとっても分かりやすく、段階的な資質・能力の育成をめざすものであれば、評価も「児童ができるようになったこと」の変化に焦点を当てた見取りによって行うことができます。評価を堅苦しく考えるのではなく、特に移行期間の今だからこそ、授業中にさまざまな見取りの方法を試みることから始めていくことをお勧めします。

A・B・Cの３段階で記録する場合の一例

A（さらにがんばっている）	Bに加え 1「相手に聞きやすい声の大きさである、相手の目を見て伝えている（相手への配慮もある）」 2「さらに情報を添えて伝えている」
B（活動の目標に沿って伝えることができた）	思い出の学校行事とその感想を自力で伝えている
C（もう少しがんばりが必要）	1「思い出の学校行事を述べているだけである（情報が不十分である）」 2「指導者の助けが必要」

池田 周（いけだ・ちか）
愛知県立大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学博士課程修了。博士（英語教育・応用言語学）。小学校英語教育学会愛知支部理事、「愛知県義務教育問題研究協議会専門部会」委員、文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会」委員などを務める。外国語としての英語リテラシー習得について、小・中・高等学校を通した指導のあり方、および国語科と外国語科の連携に関心をもつ。

〔連載〕

安河内哲也先生が聞く

英語で授業 7つの鉄則

明日から使える！

【第17回】

安河内 哲也（やすこうち・てつや）

一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

宮城県仙台南高等学校
大野 智彰 先生

大野 智彰（おおの・ともあき）

宮城県仙台南高等学校教諭。県内外の英語教員研修で多数、講師を務める。東日本大震災後、授業改善を通して生徒を笑顔にする目的で、「英語教師学びの会」を立ち上げた。現在、県内外を問わず、さらに小・中・高・大の校種を超えて連携し、英語教育について考える会に発展している。

世界の問題を自分ごととして捉えさせ、生徒の深い思考を促す問いのある授業づくり

仙台市南部の市街地にありながらも、広瀬川や大年寺山などの自然に囲まれ、広大な校地を有する宮城県仙台南高等学校。文武両道の進学校として、学校全体が一丸となって、学習・部活動に取り組んでいます。近年では授業第一主義を掲げ、社会に貢献できる主体的な学習者の育成に力を注ぎ、英語の授業では主体的、対話的で深い学びを実現する授業を展開しています。生徒の言語活動を中心とした授業づくりに取り組む大野智彰先生が受けもつ、1年生の「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業を訪ね、英語で授業を行う7つの鉄則を伺いました。

生徒たちの興味を引き出す工夫を随所に取り入れ、生徒同士で学び合い、ペアワークやグループワークに積極的に取り組む様子にご注目ください。

本日の授業　1年生「コミュニケーション英語Ⅰ」
使用教科書：Genius English Communication Ⅰ（大修館書店）／単元名：Lesson 4 Borneo's Moment of Truth より Part 2

大野先生の授業の様子はこちら

導入　生徒の気持ちを英語に向かわせ、興味を引き出す

大野先生の"I'm very happy to do the lesson with you. Please enjoy our lesson!"とのメッセージで授業開始。まず、ペアで交互に、月名を順番に英語で言い合い、生徒の気持ちを英語に向かわせた。導入は、スクリーンに映した写真の描写活動。1人が写真を見ながら英語で説明し、もう1人は写真を見ずに、聞き取った内容から想像して絵を描くペアワークだ。役割を交代して別の写真についても同様に描写したあと、どこの国の写真かを全体で考え、先生が地図を交えて、世界で3番目に大きな島のボルネオ島であると解説を加えた。

展開1 Dictogloss　リスニングからライティングへとつなぐ協働学習

ボルネオ島で起きている問題について、ALTのクリス先生による説明を音声で聞く。最初はメモを取らずに聞き、次にキーワードなどを書き取りながら聞く。続いて4人グループで、ファシリテーター役の生徒に従い、各自が聞き取ったメモをもとに情報を交換しながら、協働で英文を再構築する。その間、大野先生は教室を歩き回り、生徒たちがまとめた英文をスマートフォンで撮影し、スクリーンに写し出してクラス全体で共有する。書かれた英文を全員で読み、生徒たちが聞き取った情報の正誤を伝えながら、誤りについては正しい情報を提示した。

展開2 内容理解　問いの答えを探りながら本文を読み進めるリーディング

「なぜ、人間はボルネオ島で自然を破壊しているのか」という問いを与え、生徒たちに教科書本文からその理由を2つ読み取るように指示する。各自が考えたことをグループで話し合ったあと、生徒から発表させ、スクリーンに本文を写し出して2つの理由にあたる箇所を赤字で示し、本文の内容理解を深めていった。

展開3① 自己表現　ワールド・カフェ形式のディスカッションで多様な意見に触れる

ボルネオ島で起きている自然破壊に対して、環境と生物の多様性を守るために何をすべきなのか、ワールド・カフェ形式でグループディスカッションに取り組む。各グループでは、ファシリテーターの指示で生徒が順番に発表する。発表を聞く際には、必ずメモを取りながら聞く。ひと通り発表が終わると、ファシリテーター以外の生徒は席を移動して、新しいメンバーで同じように話し合い、多様な意見に触れて考えを深める。

展開3② 発表　世界の問題を自分ごととして捉え、考える

最初の席に戻り、ファシリテーターを務めた生徒に一番印象に残った生徒を尋ね、発表者を選出する。選ばれた2人の生徒は、「人々はエネルギーを使い過ぎる。電気を消す、シャワーは短時間で浴びるなど、すぐにできることから始めて環境を守る」などと発表した。最後に、大野先生が「ボルネオ島は日本から遠く離れているが、そこで起きている問題は私たちの生活と密接に関係している。だから、自分たちの生活を見直し、身近なところからできることを考えることが大切。このような問題を考え続けよう」とまとめ、Think globally, Act locally の考え方を提示した。

鉄則その1 誰もがワクワクする導入をする

毎回の授業の導入では、生徒がワクワクしながら取り組め、気が付いたら単元に入っていたような活動を取り入れています。今日の導入では、1人が写真について説明し、もう1人が想像して絵を描くペアワークを行いました。ほかには、1人が答えとなる物の名前は言わずにヒントを与え、もう1人にそれが何かを答えさせるクイズをすることもあります。導入で扱う題材は、これから読む本文の題材に関連するものとし、導入で面白い素材を扱い、興味をもたせることで、その後の内容理解や音読練習にプラスの波及効果が生まれます。

鉄則その2 内容を大切に扱う

英語の教員はどうしても言語を教えることに集中しがちです。しかし、単元の内容についても言語と同じように大事に扱うこと、つまり、内容を学ぶために言語を使用するCLIL（内容言語統合型学習）が言語習得には効果的であると考えています。そのためには、単元の内容について前もって調べておいたり、他教科（古文・地理・生物など）の先生と話して情報を得たり、ときには他教科と連携して授業をしたりすることもあります。事前の準備はもちろん大変ですが、それ自体が楽しく、自分自身もワクワクしながら知識が広がります。授業づくりにおいては、生徒とともに学ぶということが大事だと思います。

鉄則その3 授業は、コミュニケーションの場とする

講義形式の授業では先生と生徒の1対1の関係でしかなく、生徒が英語を使わずに授業が終わりがちです。生徒同士の言語活動を中心に授業を進めれば、生徒全員が英語を使う機会が生まれるため、私はペア・ワークやグループ・ワークを大切にしています。生徒が英語を使って活動するには、間違いを恐れない教室の雰囲気づくりも大切です。教員も完璧な英語を話そうとするのではなく、生徒にとってのロールモデルとして、自分の英語で話せばよいと思います。「英語表現」の授業でも言語活動を大切にし、生徒同士で文法を学び合い、その文法を使ってALTに通じるように話すなど、発信につながる活動を取り入れています。

鉄則その4 協働で学ぶ

今日はDictoglossを取り入れて協働学習をしました。5文程度の英文を、1回目はメモを取らずに、2回目は大事な情報をメモを取りながら聞かせたあと、グループで情報を持ち寄り、自分たちの言葉で英文を再構築する活動です。その際は、ファシリテーター役の生徒がほかの生徒の発表した内容をまとめます。そして、各グループのファシリテーターが板書したものを全員で見比べて、違いに気付いたり、共通する間違いを指摘したりしますが、今日は写真に撮ってスクリーンで共有しました。タスクは1人で解決できるものではなく、友達と助け合うことで解決できるものにすると、生徒同士の関わりが生まれます。

鉄則その5 深い思考力を問う発問をする

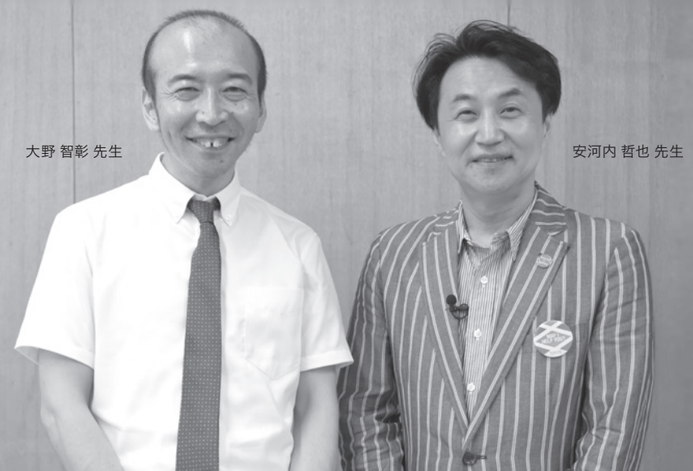
今日の授業では、「持続可能な社会をどのように営んでいくべきか」について考えさせました。社会には簡単に解決できない問題があふれています。そこで、授業中に答えが出ることはなく、授業後も考え続けていかなければならないような、大きな問いを生徒に与えたいと考えています。それにより生徒は思考を深め、社会で必要な問題解決力を身に付けることができると思います。生徒たちにはただ教科書に書いてあることを問うだけでなく、学んだ内容を既存の知識や経験と結び付け、批判的な考察や問題解決を行うような発問ができるよう、私自身も事前に教科書を読み込み、関連する情報を得るようにしています。

鉄則その6 インプットで終わらず、表現活動を行う

知識はそれだけでは価値がなく、自分に関連付けて初めて意味をもつと考えます。つまり、学んだ知識を自分ごととして捉え、話したり書いたりすることで、知識として定着すると思います。そのため、インプットをしたあとは必ずアウトプットに取り組ませています。アウトプットがあることを事前に生徒に知らせておけば、生徒もインプットの活動にも真剣に取り組むようになるものです。今日はワールド・カフェ形式を取り入れました。生徒は4人グループで自分の考えを述べ、他人の意見を聞き合い、別のグループに移動してさらに多様な意見に触れることで、新たな気付きを手に入れることができます。

鉄則その7 ICTを活用する

これまで別のプレゼンテーションソフトを使っていたのを辞めて、今年度からはPowerPointでスライドを作り、ほかの先生とも共有して授業を行っています。ICTの活用によって、板書する時間が減り、生徒の言語活動により多くの時間を割くことができるようになりました。また、今日の授業では世界で一番大きな花（ラフレシア）の写真を見せましたが、生徒が題材に興味をもたせるために、生徒の気持ちを揺さぶる写真や絵を提示することもできます。ほかには、携帯のアプリを使って、授業で分からなかったところがどこかを尋ねるアンケートを取り、重点的に解説するということもしています。



大野 智彰 先生　安河内 哲也 先生

●新学習指導要領に向けて

高等学校編

第3回

生徒同士のやり取りを通じて、意欲と力を伸ばす授業

新潟県立新潟高等学校
荒木 美恵子 先生
Mieko Araki

高等学校の新学習指導要領では、生徒が身に付けた知識を活用し、課題の解決方法を探る授業を通じて、主体的に学び、生涯にわたって学び続ける姿勢を養うことをめざしています。現行の学習指導要領の「4技能を総合的に育成する指導を充実させる」という基本方針をさらに充実、発展させ、生徒の言語活動を高度なものにしていくために、どのような授業が求められるのでしょうか。第3回は、新潟県立新潟高等学校の荒木美恵子先生による、生徒の学ぶ意欲を伸ばし、対話を用いて、より深く学びたいという生徒の意欲を伸ばす実践をご紹介します。

学びたい意欲を伸ばし、自律した学習者を育てたい

本校は創立126年の伝統校で、「真理追究、自主自律、社会貢献」を教育目標に掲げる、普通科と理数科からなる高等学校です。私はこの春に赴任し、3年生の授業を担当しています。「生徒の学びたい意欲をさらに高め、力を伸ばし、高校卒業後も英語を積極的に学ぶ学習者を育てたい」との思いから、この1年間の授業で重視しようと考えたのは、「筆者や話者の主張を理解し、そこから得た情報や考えたことを英語で表現できる力を養うこと」でした。生徒同士がやり取りをしながら、頭と心を動かし、意欲と力を伸ばす授業を行いたいと考えました。

3つの対話を取り入れた授業実践

ここでは、『CROWN English Communication Ⅲ』（三省堂）のLesson 9「What's Not for Sale?」を使用した授業実践から、3つの活動を紹介します。本文はハーバード大学教授マイケル・サンデル氏の著書『What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets』の内容を主に扱っています。

(1) ウォームアップ
「答えのない問いについての対話」

毎授業の冒頭で答えのない問いについてペアトークを行いました。以下は話題例です。

・生徒が読書をしたら、学校からお金をもらえるという制度はよいか。
・花火大会の席は、全て無料にすべきか、有料席を多くすべきか。
・高齢者の介護は、家で家族がすべきか、お金を払って施設に入れるべきか。

導入では、英語の授業への切り替えを行うとともに、本文の内容に関連する話題を用いて生徒の関心を高めるようにしました。後述のディスカッション活動へのつながりを考え、この活動では理由説明を意識させました。2分でパートナー交代。さまざまな級友と話し、笑顔が広がります。

(2) 本文理解→スピーキング
「理解したことを対話に」

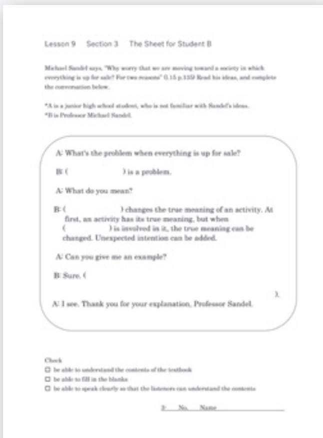
セクション3ではサンデル氏の懸念が説明されています。生徒が読み取った内容を、英語で説明するという活動を行いました。まず、サンデル氏が中学生に説明する場面を設定し、数カ所の空欄があるプリント（右写真）を用意して、空欄を埋めさせました。

空欄には2種類あります。

A) 本文の内容から比較的簡単に埋められる空欄
B) 教科書の抽象内容から「関連する具体例」を考えて提示する空欄

B) が、この活動の肝となり、本文内容を理解したうえで、教科書に書かれていない例を考える必要があります。生徒によって答えに「違い」が出てくるため、ほかの人がどのようなことを考えたのか、生徒の関心が高まります。

ペアで協力してプリントを完成させたあと、相手に伝わる英語で話せるように練習します。そして、いよいよ、会話の場面。半分の生徒が《サンデル役》となり、教室の周りの壁の前に立ちます。残り半分の生徒が《中学生役》として、サンデル役の前に立ち、会話をしながら説明を受けます。会話後、中学生役はお礼を言って、次のサンデル役のもとへ移動しました。



Lesson 9 Section 3 The Sheet for Student B

A: What's the problem when everything is up for sale?
B: ( ) is a problem.
A: What do you mean?
B: ( ) changes the true meaning of an activity. At first, an activity has its true meaning, but when ( ) is involved in it, the true meaning can be changed. Unexpected intention can be added.
A: Can you give me an example?
B: Sure. ( ).
A: I see. Thank you for your explanation, Professor Sandel.

(3) 単元のまとめ
「考えたことを対話に」

本文内容を踏まえて、4人程度の班になってディスカッションを行いました。生徒たちは、次の a) ～ e) の5つの話題から、1人1つずつ担当します。

a) 腎臓など2つある臓器の1つを売ること
b) 体育祭の各団の企画を、イベント会社にお金を払ってやってもらうこと
c) 友人にいてもらいたい時に、お金を払ってレンタルするサービス
d) 救急車の有料化
e) 企業からお金をもらい、おでこをその企業の広告・宣伝のために使うこと

自分の話題について、賛成・反対の両方の理由をまず各自で考えます。その後、クラス内で同じ話題を担当する人同士で集まって、賛成・反対の理由を相談し合います。

班で討論を行う前に、進行の型（上写真）を共有しました。司会役を決めて、班内の討論を開始。トピックの良い点と悪い点の両方について述べ、班員の意見も募ります。時間は12分程度としましたが、話が盛り上がり、実際には15分ほど行いました。その後、メンバーを代えて、再度ディスカッションを行いました。

生徒の振り返りをいくつか紹介します。

> ○いろんなテーマを一生懸命話せて、とても楽しかった！ もっと話したかった！
> ○自分が思っていたことと違う考え方があり、とても有意義な時間だった。ほかの人と対話することで、より広い視野をもって教科書の文章を読むことができ、改めて考えを共有することの大切さを認識できた。
> ○「答えのない問い」がこの先多く出てくると思うので、慣れていきたいです。

最後に、ライティング活動を行いました。自分の意見を整理し、討論時に学んだ表現を書いて定着させることを目的としています。単元全体の内容を踏まえて、自分の意見を英語でまとめました。

生徒同士のやり取りのある授業づくりで心掛けていること

私が生徒同士のやり取りのある授業を計画する際に、心掛けていることは以下の点です。

> ①本文から推測したり、抽象を具体で表したりする必要がある問いなど、考えさせる問いを用いること。
> ②各生徒の考えなど、人によって違う答えが生まれ、相手の考えが知りたくなるような問いを用いること。
> ③難しい課題の場合は、同じ問いや課題に取り組む生徒同士で相談できる時間を取るなど、助けを求められる仕組みを用意すること。
> ④型を少し提示すること（枠と自由度のバランスに気を付ける）。
> ⑤振り返りを行わせ、次への学びへつなげること。

また、これらを行う前提として、クラス内で意見を言いやすい雰囲気づくり、いろいろな意見を認め合うクラスづくりをすることが必要です。生徒の考えをよく聴き、受け止め、肯定的に反応するなど、教師の態度や言葉も大切だと考えます。

「仲間と一緒だったからたくさん学べた！」と感じられる授業を

私たちは対話をすることで、新しい発見があり、学びを深めることができます。その喜びを経験した人は、生涯にわたり人との対話による学びを大切にできると考えます。

最後に、意見をやり取りする授業ができなかった最近の失敗例をお伝えします。筆者が投げ掛けている問いに対して、ある1列の生徒たちに意見を述べてもらいました。偶然にも誰もが筆者に賛同する内容の意見でした。私はそれぞれの意見を聞き、パラフレーズしながら受け止めて、授業を終えました。すると、授業後の振り返りシートに、ある生徒が次のようなコメントをぎっしりと書いてきたのです。それは「筆者の側だけを支持する授業は良くないのではないか。僕には違った意見があった」という内容でした。反省させられました。私は（マイケル・サンデル氏のように!?）もっと意見がある生徒を募ったり、ファシリテートする役割を果たすべきだったのかもしれません。今後は、生徒がほかの生徒に問いを投げ掛けたり、対話する力を身に付けて、意見のやり取りをし、考えを深めたりする授業 —「今日も仲間と交流したから、より学べた、またもっと学びたい！」という授業—を行うことができるようにしていきたいと強く感じています。

●新学習指導要領に向けて

中学校編

第3回 「意見・考えを大事にする授業」を実現するために

福井県教育庁 義務教育課 主任
加藤 修 先生
Osamu Kato

2017年3月に告示された中学校の学習指導要領は、2018年度から3年間の移行期間を経て、2021年度より全面実施となります。今回の改訂により、英語の授業は、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」とされました。新学習指導要領に向けて、授業改善に取り組む先生方によるリレー連載第3回は、福井県教育庁義務教育課主任の加藤修先生が、以前に福井大学附属義務教育学校で実践してきた授業をご紹介します。

授業づくりで大事にしていること

私は2014年7月の「全英連・英検共催 教員向け国内研修」に参加し、それ以来、生徒が「豊かな英語力とコミュニケーション能力をもつ」ために、「意見・考えを英語で伝え合う」授業づくりを心掛けてきました。大切にしていることは①生徒の意見・考えを大事にすること、②コミュニケーションに必然性をもたせることの2つです。

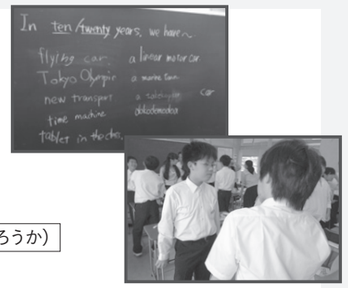
まず、授業（コミュニケーション）の中心は生徒であるべきです。①を実現するために、生徒が自分の意見や考えをもつことができるような言語活動を準備します。授業は生徒が本当に言いたいこと、聞きたいことを互いに伝え合い、生徒の思考の流れを捉えながら展開します。ここで重要なことは、生徒の意見や考えを、先生も本当に知りたいかということです。先生が生徒の伝えたいことに興味をもち、生徒の多様な考えを尊重することで、先生も生徒と一緒にその場のコミュニケーションを楽しむことができます。

次に、授業は実際のコミュニケーションの場であるべきです。そのため、コミュニケーション活動の目的・場面・状況を明確にし、英語の知識・技能を実際に使う場を設定することが重要です。私は、②の達成指標の1つとして「この活動は日本語で行っても意味があるかどうか」を考えながら、高い自己関与度、強い動機付けと持続性のあるトピックを準備するようにしています。②が実現すれば、生徒たちは課題解決に向けて、自分から言語活動に積極的に取り組むようになっていきます。

発問を中心とした流れによる学習活動

ここでご紹介する事例は、以前勤務していた学校での実践です。中学2年生の1学期に“Our Future”という単元（9時間配当）を設定し、次のような発問を中心とした流れで学習活動を行いました。

- What do you think about the jobs?（この職業について、どう思うか）
- What do you want to be in your future?（将来、どんなことをしたいか）
- Why do we need the jobs?（この職業は、なぜ必要なのか）
- Imagine our future.（未来を想像してみよう）
- What jobs are disappearing now? Why?（どんな職業がなくなるのだろうか）
- What new jobs do we need in our future?（将来、どんな職業が必要になるのだろうか）
- What do you think about our future?（自分たちの未来についてどう考えるか）



「未来」という大きなテーマは、生徒たちにとって自己関与度は非常に高いのですが、考える手掛かりが少なくて難易度が高くなります。そこに配慮し、“生徒の思考に沿ったスモールステップ”として発問の流れを設定しました。それが功を奏し、生徒たちは単に「自分の将来の夢」について狭い範囲の中で自己表現をするのではなく、身近な職業や現在の状況についてじっくりと考えたうえで想像力を働かせ、より具体的で現実感のある未来について広く深く考えることができました。

自分たちの未来について考え、発表し合う

まず、単元の最初に、教科書に登場する職業の目的を考え、自分の将来について具体的に考えるための足掛かりとしました。そして、「今したいこと」から「退職後にしたいこと」まで、時間の幅をもって考えました。その後、役に立つ職業とはどのようなものかを考え、10年後の生活を想像し、今後なくなっていく職業を予想しました。生徒からは「清掃員」「タクシーの運転手」「レジ係」などが出ましたが、その主な理由は「ロボットが代わりにしてくれるから」というものでした。

そして、「これから必要となる新しい職業」を考えると、“sky traffic police”

“population keeper” “space travel agency”などの近未来的で想像力あふれるアイデアが出ました。それらをもとにグループでポスター発表を行い、さらに、“Our Future”をトピックにレポートを書き、クラス内で読み合いました。

振り返りでは、「新しい仕事は何か困っていることがある時に現れると思った」「長時間使ってこのテーマで学習してきたが面白いことや疑問点がたくさん出てきた」などの記述があり、生徒が自分の将来や未来の職業について真剣に考え、単元の学習が進むにつれて学びが深まったことが見て取れました。

必然性のある言語活動のために大切なこと

この単元の授業づくりで私が最も長い時間をかけたのは、発問を作ることでした。主な発問は前述の7つですが、単元に入る前に発問の候補をできるだけ多く（多いもので1つの発問につき10種類）作り、生徒にとって、より関心や関連があるもの、意見や考えの交流をより活発にするもの、そして、私自身が本当に考えてほしいものを選定しながら練り上げていきました。また、職業や未来について考えたり意見を交流したりする「必然性」ももたせるように工夫しました。さらに、単元が始まって、生徒の意見（つぶやき）を拾い、生徒の振り返りを見ながら授業をしていくと、生徒の思考の流れがこちらの想定を超えてくることがしばしばあり、発問を変えたり新たに追加したりすることもありました。

生徒の意見や考えを中心とした必然性のある言語活動を行うには、生徒がじっくりと考えて自分の意見をもつための発問が不可欠です。発問の工夫により、「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕・〔発表〕」「書くこと」の必然性が出てきますし、どの活動でも英語を使う必要があるので、生徒自ら、必要かつ適切な語彙や文法を習得しようとします。そうして、生徒は「英語を何のために学ぶのか」を自然に理解できるようになります。

例えば、皆さんは自分のふるさとを紹介する授業をする時には、どのような活動を考えますか。

> 例）「福井の紹介」
> →『福井の過疎化ストップ！』（福井を広くアピールし、課題を県民に知ってもらおう）

このように生徒たちの住むところの現状に合わせて言語活動を設定することにより、単に「私たちの故郷を紹介する」という活動をするよりも目的・場面・状況がより明確になり、生徒たちへの動機付けも強まるのではないでしょうか。

今後の展望 ～新学習指導要領の全面実施に向けて～

私たち中学校英語科教員には、これまで大切にしてきたことを推し進めながら、さらに授業改善をしていくことが求められています。「コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」という目標を達成するためには、以下のようなポイントが重要であると考えます。

言語活動	生徒が実際に英語を使用して、意見や考えを伝え合う活動をすること
英語で行われる授業	授業を実際のコミュニケーションの場とするため、生徒の英語による言語活動の時間を確保するために、（その手段として）授業を英語で行うこと
生きて働く知識・技能	英語を実際のコミュニケーションの場面で活用できるようにすること
技能・領域の統合	「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り・発表〕」「書くこと」の4技能・5領域の活動を関連付けること
小中連携	小学校における外国語教育の現状を把握し、生徒の小学校での学習履歴を意識した授業を行うこと

最後に、「生徒も先生もワクワクして臨む授業」を実現するために、教室内の全員が楽しく真剣に考え、みんなにとって素晴らしい出会いや学びがある授業をめざして、これからもがんばります！

●新学習指導要領に向けて

小学校編

第3回

児童一人一人の学び方を大切にした特別支援学級での外国語活動

滋賀県 東近江市立湖東第二小学校
西河 彩恵子 先生
Saeko Nishikawa

2020年度から全面実施される小学校の学習指導要領では、3、4年生で外国語活動、5、6年生で外国語科が導入されます。今年度から2年間の移行期間中にすべきこととは何でしょうか。この連載では、新学習指導要領に向けて、実践を積んでいる小学校の先生方の取り組みを紹介します。第3回は、滋賀県東近江市立湖東第二小学校の西河彩恵子先生による、特別支援学級における外国語活動の指導の実践です。

「英語が好き!!」という強い思いを大切に見守り育てる

私は特別支援学級を担任し、そこで外国語を教えています。私のクラスの児童が最も楽しそうに生き生きと学ぶ授業が、外国語活動です。その理由はおそらく、子供が自分の得意なことで学べる授業であるからだと考えます。

特別支援学級に在籍する児童の特徴は一人一人が異なり、そのなかには、自分の得意なことを外国語活動の授業で十分に発揮できる子がたくさんいます。例えば、視覚からの記憶が得意で単語のつづりを記号的に覚えることができる子、聴覚からの記憶が得意でALTの発音を正しく真似できる子、プログラミング感覚に優れ、動詞の変化に敏感に対応できる子、人が大好きで初対面のALTに物おじせず、自ら英語で自己紹介できる子などです。

そうしたなかで、私は「2017年度 英語教員海外研修」に参加する機会を得ました。このプログラムに参加したいと思った理由は、英語教授法を学び、特別支援学級における外国語活動の指導法を探りたいと日々感じていたからです。

研修先のニューサウスウェールズ大学では、特別支援学級における外国語活動の有効な実践は何か、という視点で講義を受けました。そのなかで大切にしていきたいと感じたことは、

①児童の生活・興味関心に沿った内容であること
②単元･1時間のゴールを明確にしたうえで、個々に目標を設定すること（児童が選ぶ）
③活動の取り入れ方を工夫して、児童の集中を保持すること
④一人一人の発達・認知特性の違いを理解し、それぞれの学び方を尊重すること
⑤「学ばせる」のではなく「学びを引き出す」環境づくりをすること

の5つです。これらを意識して、帰国後、授業に取り組んでいます。子供たちは、休み時間に英語の歌を歌ったり、頼みごとをした時に「No, I can't!! 今忙しいから!」と自然に英語を使ったり、“Look!! Sun, beautiful!!”とALTに一生懸命に伝えたりすることがあり、児童の秘めた力にいつも感心しています。これからも、「英語が好き!!」という児童の気持ちを大切に見守り育んでいきたいと思います。

英語を学ぶ理由を考え、自ら目標を立てて取り組む

実践1 英語を学ぶ理由について考えよう

昨年、海外研修から帰国したあとの、2学期の1回目の外国語活動の授業では、シドニーのオペラハウス、コアラや美しいビーチなどのさまざまな写真や、ホストファミリーと撮影した写真を使って、英語を学ぶ理由を考える授業をしました。ホームステイ先の写真には、アイルランド出身のホストマザーとファザー、ロシアからの中学生、中国からの留学生2人、サウジアラビアからの女性1人と私が写っていて、どこの国の人かを当てるクイズでは大盛り上がり。児童の学習の振り返りには、「出身国はいろいろだけど、英語を使えば友達になれることが分かった」「英語を話せるようになるといいことがたくさんある」「英語をもっとがんばって、話せるようになって、友達をつくりたい」「私もオーストラリアに行ってコアラを触りたい」とありました。この授業が、英語を学ぶ動機につながる記憶として、児童の心に少しでも残ればと思っています。

実践2 自分を紹介しよう

昨年度の3学期のめあては、「自分を紹介しよう」に設定しました。「なぜ、自分を紹介するのかな?」と問い掛けると、「中学校の初めの英語の授業でしないといけないから（6年）」「外国の人と友達になるために（5年）」と、それぞれが自己紹介への意欲をもって取り組むことができました。①名前 ②年齢 ③好きなもの ④できること ⑤将来の夢 ⑥Nice to meet you. の6項目で、それぞれが3学期の発表会までに何番までチャレンジするのか目標を立てました。

最後の発表会では、1人ずつ前に出て発表し、ALTから個々に良かった点についてコメントをもらえたことが、児童にとって大きな励みになったようです。不安だからと④番までしか練習していなかった子が、本番では突然⑥番までチャレンジした姿には、私もALTも驚かされました。表面に出ている力よりも、児童のもつ力の方が格段に大きいことを、特別支援学級では忘れてはいけないと常に考えさせられます。

環境づくりの工夫と授業づくりの工夫

特別支援学級における外国語活動は、児童の心を揺さぶる環境づくりが大切であると考えます。私が大切にしていることは、「英語を目にすることや使うことが日常である環境」「“世界の中の日本”という感覚をもつことができる環境」をつくることです。

教室には各国のあいさつが記された世界地図、世界各国の写真と国旗が記された世界地図、5年生の社会科で活用している白地図の3種類を掲示しています。また、英語の絵本コーナー、地球儀と子供用の英語辞典を置いた調べ学習コーナーも設置しています。さらに、日直の仕事として、帰る前に次の日の英語の月カードと曜日カードを貼ってもらうようにしています。このような環境のなかで、1人の児童は、児童用の英語辞典を声に出して読むことが日課になりました。また、「外国に行きたくないから、英語なんか勉強したくない!」と言っていた児童も、今では外国に興味をもち、外国語活動の授業に積極的に参加しています。少しずつですが、児童の心境の変化を感じています。

また、授業づくりでは、「感覚を働かせ、経験的に学べる具体物での学習」を大切にしています。見る（視覚）・聞く（聴覚）を働かせることはもちろんですが、手で触る・持つ・動かすという触覚を働かせることも大切にし、少しでもその刺激・経験が記憶に結び付くようにと考えています。

外国語活動の授業では、特別支援学級にある絵カード、ブロック、ままごとセット、オセロ、すごろくなども大活躍します。先日、ままごとセットを使って「買い物をしよう」という授業をしました。八百屋さん、お客さん、レジの人に分かれてのロールプレイです。児童全員が参加できる基準を考え、品物は全て100円にしました。子供たちは1,000円を持って買い物に行き、10個までなら買えることを分かっています。“I want ...”を使って話すことが目標ですが、お店屋さん役のALTから“Big or small? ”“How many? ”と聞かれると、児童は正確に答え、アドリブを楽しむ余裕さえも見せていました。～百円、～千円の言い方も練習し、「チャレンジしたい人は英語で言ってみましょう」と言うと、全員が英語でチャレンジしました。その意欲の高さに、いつも児童の可能性を感じています。

特別支援学級での外国語活動で大切にしたいこと

私が特別支援学級の外国語活動で大切にしたいことは、①児童の発達特性・認知特性を理解すること ②一人一人の特性に合わせた授業の形を模索することです。

特別支援学級に在籍する児童には、苦手なことがある一方で、得意なことやチャレンジできることもたくさんあります。外国語活動は、児童の得意なことで学べる学習であり、発達・認知特性に合わせて児童の強みを発揮することができると考えます。また、ゲーム感覚で安心して、楽しく自己有能感や自信を育てることができると感じています。ALTとの会話に進んで取り組む児童の姿を見ていると、話す態度は、児童の関心・意欲で養うことができると考えます。

もちろん、児童一人一人の能力は違います。障害の内容や困難さ、本人の特性によっては、外国語活動に参加することが難しい場合もあるでしょう。しかし特別支援学級では、日々の児童の姿や発達検査の結果から、児童の発達・認知の特性を正確に理解し、それに合わせた方法で外国語を学ぶことで、英語運用能力を高めることが十分に可能であると希望をもっています。

［高大接続改革ニュース］

TEAP、英検®が選ばれる理由

2020年度から始まる「大学入学共通テスト」の英語試験では、大学入試センターが認定した外部資格・検定試験の活用が予定されています。生徒はどの外部資格・検定試験を選べばよいのか。そして、いつ、どのように受験し、活用すればよいのか。公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）にもそのような質問が寄せられています。ここでは、大学入学共通テストについて改めて解説するとともに、英検協会が実施しているTEAPと実用英語技能検定（英検）が選ばれる理由をご紹介いたします。

大学入学共通テストとは？

「大学入学共通テスト」（以下、共通テスト）とは、現在、国公立大学ほか私立大学全体の約9割が入学試験で利用し、受験生の8割以上が受験する「大学入試センター試験」に代わって、2020年度から実施される新しい試験です。**2018年度現在の高校1年生以降の生徒を対象**としています。

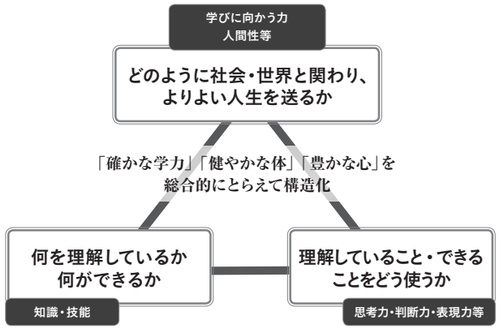
共通テストでは、センター試験で実施されているマーク式の問題に加え、数学と国語では**記述式問題も導入**されることになりました。また、**学力の3要素を重視**し、知識・技能に加えて、複数の情報を組み合わせて**思考力・判断力・表現力を測る**ような問題が出題されることになりました。さらに英語の試験では、2023年度まで、大学入試センターが出題する2技能（読む・聞く）の問題と、**4技能（読む・聞く・書く・話す）を測定する外部資格・検定試験を併用**することが予定されています。

◆どう変わる？ センター試験と共通テスト

センター試験	共通テスト
・出題されるのは「マーク式」問題のみ	・マーク式に加え、国語と数学では一部「記述式」問題
・英語は2技能（読む・聞く）のみ	・英語は2技能に加え、外部資格・検定試験を活用して4技能を評価
・高校の授業で学んだ知識・技能が身に付いているかを問う	・「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」を一層重視

◆共通テストで問われる力とは？

［育成すべき資質・能力の三つの柱］



文部科学省提供

文部科学省は大学入試改革の方向性として、**「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する**、としています。学力の3要素とは、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を意味します。

共通テストはマークシート問題を見直し、各教科・科目の特質に応じて知識・技能を十分に有しているかの評価を行いつつ、記述式問題等を通じて知識・技能を活用した考察の過程により、思考力・判断力・表現力を中心に評価を行います。また、各大学の個別選抜試験では、学力評価に加えて人物評価を重視し、主体性・多様性・協働性の評価を行います。

どの試験を活用できるのか？

2018年3月に、大学入試センターが公表した、「大学入試英語成績提供システム」への参加が認められた資格・検定試験は次の7つです。

- 実用英語技能検定
- TEAP（TEAP、TEAP CBT）
- IELTS（アカデミック・モジュール）
- ケンブリッジ英語検定
- TOEFL iBT
- TOEIC（TOEIC Listening & Reading Test、TOEIC Speaking & Writing Tests）
- GTEC

※平成30年3月26日　文部科学省『各資格・検定試験とCEFRとの対照表』参照

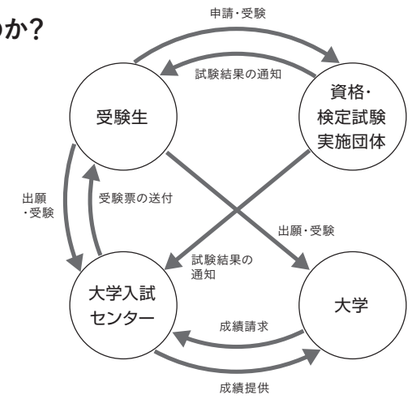
このうち英検については、**英検CBT、英検2020 2 days S-Interview、英検2020 1 day S-CBT**の3つの新しい方式をご利用いただくことになります。これらの新方式の英検は実施方式が異なるだけで、従来の英検と出題内容、難易度、採点基準、合否判定、証明書類は全て同じです。いずれも同じ「英検」の資格として利用することができます。なお、従来の英検は、「大学入試英語成績提供システム」を介さない入試で、これまで通りにご利用いただくことが可能です。

英検の種類	高1・高2	高3 AO・推薦	高3 一般入試	高3 共通テスト	実施方法
① 英検（後援：文部科学省）	○	○	○	×	受験対象 制限なし 実施方式 RLW:PBT / S:対面式 受験日数 2日 受験級 1級〜3級
② 英検 2020 2 days S-Interview※（後援：文部科学省）2019年度〜	—	○	○	○	受験対象 高校3年生 実施方式 RLW:PBT / S:対面式 受験日数 2日 受験級 1級〜3級
③ 英検 2020 1 day S-CBT※（後援：文部科学省）2019年度〜	—	○	○	○	受験対象 高校3年生 実施方式 RLW:PBT / S:録音式 受験日数 1日 受験級 準1級〜3級
④ 英検 CBT（後援：文部科学省）	○	○	○	○	受験対象 制限なし 実施方式 RLW:CBT / S:録音式 受験日数 1日 受験級 2級〜3級

※英検2020 2 days S-Interviewおよび英検2020 1 day S-CBTの実施時期については現在検討中です。決定次第速やかにお知らせいたします。
※文部科学省後援名義は今後申請予定。

英語の外部資格・検定試験をどのように活用するのか？

英語試験においては、大学入試センターが認定した外部資格・検定試験（以下、認定テスト）が活用され、4技能を評価します。共通テストを受験する場合、受験生は認定テストのなかから、**高校3年生の4月から12月までの間に2回まで受験**し、その成績を大学に提出することになります。ただし、受験生が大学に直接、試験結果を提出するのではなく、試験結果を一元的に集約している大学入試センターが、大学からの請求に応じて成績を提供します。これが「大学入試英語成績提供システム」のしくみです。



TEAPが選ばれる理由

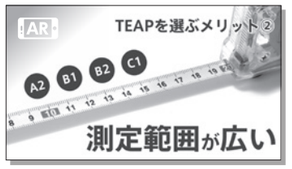
〔TEAPを選ぶ4つのメリット〕

①TEAPのために学習した内容が大学入学後の授業・学習でも役立つ
②1つのテストで広範囲に大学の求めるスコアに対応
③併願する大学にもスコアを利用できる
④先生に試験実施の負担がなく、生徒は良質な試験環境で実力を発揮

大学教育で必要とされる英語力を測定

TEAPは英検協会が上智大学と5年間かけて共同開発したテストです。日本における「大学教育レベルにふさわしい英語力」を測ることを目的とし、**大学教育で遭遇する語彙・場面（留学も含む）・分野**を想定した設問内容です。学習指導要領に配慮しており、高校3年生の英語力を測定するのにふさわしいレベルとなっています。

測定できる英語力の範囲が広い



TEAPで測定できる英語力の範囲は**CEFRのA2〜C1に設定**しています。国立大学協会が示す「認定試験結果の活用」のガイドラインは、
①一定水準（CEFR対照表のA2）以上の認定試験の結果を「**出願資格**」とする
②CEFRによる対照表に基づき、新テストの英語試験の得点に「**加点**」する
であり、これらのいずれか、または「**併用**」することを基本としています。併用する場合には、出願資格としての一定の水準（CEFR対照表のA2）以上を設定するとともに、それを超える水準（B1からC1以上またはC2まで）ごとに加点する点数を定めて、共通テストの英語の成績に加点するものとしています。これらの具体的な設定については、各大学・学部が主体的に定めることになります。

私立大学もすでに多数採用

TEAPは英語4技能を正確に測定し、高校生に適した質の高いテスト設計が支持されています。2015年度の実施開始から、その採用実績は年々拡大し、入試でご採用いただいている大学は、国公私立大学を合わせて**全国で120大学**に上ります。入試で4技能を測ることが重視されるなか、今後もTEAPを利用した入試制度は、私立大学を中心にさらに広がっていくことが予想され、併願での受験においてもスコア利用が可能となります。

公開会場で1日完結

TEAPは**公開会場での実施**を原則としています。公開会場で実施することにより、先生にとっては、自校で重要な試験を実施するという心理的・業務的な負担をおかけすることがありません。また、安定した試験環境の下で筆記試験を行い、個室でのスピーキングテストを実施しますので、生徒にとっては良質なテスト環境を実現することができます。さらに、**4技能を1日で測定**するため、日程的にも負担が少なく実施することができます。

現在、TEAPは20都道府県（TEAP CBTは11都道府県）での実施を予定しておりますが、2020年度からは、全国の多くの大学様に幅広くご活用いただけるよう、開催地の拡大に努めてまいります。

英検®が選ばれる理由

後援：文部科学省

〔英検を選ぶ4つのメリット〕

①生徒にとっての学習環境、先生にとっての指導環境が整っている
②生徒の負担が少なく、めざすレベルをより的確に測定できる
③生徒のニーズに応じて試験方式を選択できる
④先生に試験実施の負担がなく、生徒は良質な試験環境で実力を発揮

学習しやすい・指導しやすい

英検テストファミリーは年間約366万人が受験するテストとして、多くの方に親しまれています（2017年度実績、英検テストファミリー総志願者総数）。生徒にとっては、小・中学生の頃から受験して慣れ親しんでいる最も身近なテストです。また、**学習指導要領に配慮した問題内容**となっていますので、普段の学習によって身に付いた力を試験でも発揮していただくことができます。先生にとっても、各級のレベルをご理解いただいており、生徒への指導方法も確立されていることが多いようです。

レベルに合った試験内容

英検は受験者の**学習段階に合わせた「級」が設定**されています。各級でコンテンツ、語彙・文法などを設定し、級レベルにそぐわない難易度の高い問題は出題されず、受験者の英語力に即したレベルの問題にチャレンジすることができます。

また、級ごとに測定範囲を定めていることで、**試験時間をより短く**設定でき、なおかつ**比較的リーズナブルな検定料**を実現しています。そのため、受験者に負担が少ない試験といえます。

選べる試験方式

共通テストでは、**英検CBT、英検2020 2 days S-Interview、英検2020 1 day S-CBT**の3つの試験方式からお選びいただくことができます。コンピュータを利用することに慣れている、対面式の面接の方がスピーキングの力を発揮できる、録音式の方がスピーキングの力を発揮できる、といった受験者のニーズに応じて試験方式をご選択ください。

共通テストを受験する場合には、高校1、2年生のうちに**従来の英検**や**英検CBT**で試験形式に慣れておき、高校3年生になったら、認定されている3つの方式からご受験いただく受験プランがおすすめです。

公開会場で実施

英検の新しい3つの方式は、**公開会場での実施**を原則としています。公開会場で実施することにより、先生にとっては、自校で重要な試験を実施するという心理的・業務的な負担をおかけすることがありません。また、安定した試験環境の下で筆記試験を行い、個室でスピーキングテストを実施し、CBT方式も良質な受験環境を整備した会場での受験となります。そのため、**生徒にとって良質なテスト環境**を実現することができます。

会場は試験方式によって異なります。今後、詳細が決まり次第、英検協会ウェブサイトなどでお知らせしますので、ご確認ください。

第9回 TEAP連絡協議会レポート

大学入学共通テストに向けて
TEAPの現状とこれから

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、第9回TEAP連絡協議会を2018年7月、東京（法政大学）と大阪（近畿大学）で開催した。今回は高等学校でのTEAPの活用状況や、大学における入試でのTEAP利用状況および英語教育改革への取り組みについて、TEAP採用校からの報告を受け、高等学校および大学では今後、大学入試に向けてどのように取り組んでいくべきかを、登壇者と参加者がともに考える場となった。大阪会場での発表内容をご紹介する。

01 2017年度 TEAP公開試験実施報告
英検協会 教育事業部部長　塩崎 修健

2017年度は年3回、全国12都市にて実施。3回の合計志願者数は前年度比176%の2万4,434名となった。その背景には、①入試で利用する大学が急増していること、②高等学校での団体受験者数が増加していることがある。志願者層は、入試での利用を見越して早めに準備を開始しようとする高校2年生の第2回での割合が増加したほか、第3回では入試直前まで挑戦し、より高いスコア取得をめざす高校3年生の割合が多かった。

2018年度については、TEAPは全国20都市、TEAP CBTは全国11都道府県での実施を予定しており、2020年度にはTEAPを全国47都道府県で実施する予定だ。また、TEAP採用大学数は120大学まで広がり、2018年度入試に関する大学への調査では、外部検定試験での英検®とTEAPの採用が圧倒的に多かった。高校生が利用した外部検定試験についても、学習指導要領に配慮した問題設計であり、普段の英語学習の成果を発揮できるとして、英検とTEAPが選ばれていることが明らかになった。

02 高校現場でのTEAP活用状況 —進学実績につながる4技能指導法
大宮開成中学・高等学校 中高一貫部高校主任　小林 佑樹 先生

大宮開成中学・高等学校は生徒全員の4年制大学への現役合格をめざし、国公立大学や難関私立大学への合格実績が伸びている。進路指導においては、進路指導部主導でなく、学年の担任がイニシアチブを取り、合格実績に関する数値目標を設定して取り組む。英語科では高等学校入学前から基礎基本の習得を徹底したうえで、4技能をバランスよく育成し、思考力を鍛えることを重視している。

TEAPの受験者数は年々増加しており、2017年度は378名が受験。全国最多の個人受験者数となった。校内におけるTEAP受験者数増加の背景には、TEAPプロジェクトの発足により、教員、生徒、保護者が一体となって取り組んできたことがある。生徒向けのガイダンスや技能別対策講座、後輩への受験報告会のほか、保護者会ではTEAPについての説明を行い、大学入試への理解を得た。TEAPは難易度が適度であり、語彙や場面が生徒に分かりやすい設問だという印象を受けている。また、早期に受験して志望大学の基準スコアを超えることで、他教科の学習に専念することができ、センター試験や大学の入試対策としても有効である。今後も、進取の精神による新しい入試への挑戦と、協働の精神による他教科教員・担任・保護者との連携を進めていきたい。

03 明治大学の入試における外部試験利用と教育効果
明治大学 経営学部　山下 佳江 教授

一般選抜入試における英語4技能試験の活用は、2017年度入試での経営学部の「英語4技能試験活用方式」の導入に始まった。2018年度入試では商学部が「英語4技能利用方式」、国際日本学部が「英語4技能試験を活用した外国語満点換算方法」を導入した。2019年度入試では、全学部統一入試で「英語4技能試験を活用した外国語満点換算方法」を導入。農学部、経営学部、国際日本学部、総合数理学部の4学部が実施し、TEAPなどのスコアに応じた英語試験の基礎得点を付与する。

経営学部では、海外留学や国際ビジネスに興味のある学生のため英語スキルと専門知識を融合した英語ベースの特別カリキュラム「グローバル人材経営育成 トラックGREAT」を設置した。高大接続の観点からいち早く「英語4技能試験活用方式」を導入、入学前から4技能を駆使した英語運用能力の獲得をめざす志願者を募集し、GREATなど学部の国際教育との接続を図った。5年間で明治大学と海外大学の2つの学位取得可能なデュアルディグリープログラムやハーバード大学など海外トップユニバーシティへの派遣も始まった。明治大学では、今後も高い志をもつ学生を力強く後押ししていく。

04 京都大学の英語教育改革と高大接続に向けた準備状況
京都大学 国際高等教育院附属国際学術言語教育センター　金丸 敏幸 准教授

2016年度より、1回生はリーディングとライティング-リスニングの2科目を必修とした。リーディングでは学部ごとの目標に合わせた教科書を設定し、英語を通じた教養を身に付け、ディスカッションやプレゼンテーションを含む授業を行う。ライティング-リスニングは全クラス共通のシラバスを作成し、目標と評価の統一を図っている。ライティングは前期で300〜500語の英語エッセイ、後期には1,000〜1,500語の英語レポートに取り組む。リスニングはオンライン教材で課題に取り組み、授業中にリスニングテストを行う。

2回生以降の選択科目「英語で学ぶ教養・共通科目」には280科目以上を設定。海外大学と同水準で学び、学術英語を実践的に修得して、留学生と交流を深める機会も用意した。1回生から海外大学でのサマープログラムに参加し、3回生では半年から1年の交換留学へ出る学生も多い。

入試では英語認定試験の成績によって、高等学校から大学の一貫した英語運用能力を評価し、入学後の英語による学習の可能性を判断する材料としたい。入学後にそれらを活用する方向も検討していきたい。

05 近畿大学国際学部の早期留学と英語教育の取り組みと成果
近畿大学 国際学部　高木 宏幸 教授

国際学部では、全学生が1年次後期から2年次前期にアメリカへ留学する。そのため1年次前期は、留学中の英語学習と継続性をもたせるため、留学時に学ぶELSランゲージセンターの教員が授業を行う。留学中は提携大学のELSランゲージセンターでの語学留学を基本とし、英語力の高い学生には、留学後半に現地大学の正規科目を履修することができる機会も用意している。帰国後は、ビジネス・アカデミック英語として実用的な英語力の習得をめざす。また、留学中に培った力を伸ばすため、2年次後期以降は専門科目の多くを英語でも開講し、実用的な知識や技能を扱う科目や、専門性を深める科目を履修することができる。さらに、スキルを広げたい学生を対象に、選択科目として第二外国語（独・仏・西・中・韓・タイ・ベトナム）も開講し、高いレベルでモチベーションを保つための工夫を施している。

国際学部における留学とは、大学生活の集大成ではない。入学直後の早期段階に留学し、異文化体験をすることで、課題や問題意識を整理し、教養・専門科目における、より深い学修へとつなぐ基盤として捉えている。

〔連載〕

英検２級・準２級・３級 ライティングテストを活用した 発信力の育成

Write more. Write well. Write it right!

第３回

２級ライティングテストに関連して

研修会などで、「私は、高校でも大学でも、まして中学校ではまとまった文章を書くライティングも経験しないまま教員になりました。自分が習っていないことを、どのように教えていってよいのか不安です」という声がよく聞かれます。ここでは、そんな先生方に向けて、「大丈夫！ライティングは難しくないですよ。楽しいですよ」ということをお伝えしていきたいと思います。今回は実用英語技能検定（英検）２級のライティングテストを例に、パラグラフ・ライティングについて考察します。

大井 恭子（おおい・きょうこ）

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英米文学科卒、New York 州立大学 Stony Brook 校大学院言語学科博士課程修了。博士（外国語教授法）。専門は英語教育、応用言語学、クリティカル・シンキング。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築をめざしている。

パラグラフ・ライティング＝意見文ではない

英検２級というと、高等学校の仕上げの段階の英語力を測るものと言えるかもしれません。第１回でも書きましたが、英検一次試験のうち、ライティングテストはわずか１問とはいえ、CSE スコアで見ると一次試験の３分の１のウエートを占めています。高等学校までの英語学習の総仕上げとして、生徒がきちんとした英文を書けるように指導したいものです。

高校生になると、「英語表現」などの科目を通して、パラグラフ・ライティングの理解や実践も進み、だいぶパラグラフ・ライティングには慣れてきているかと思います。ただ、英検の問題も、また高校入試や大学入試で出される課題も「〜に賛成ですか。反対ですか。その理由を述べなさい」といった設問が多く、テキストタイプとしては「意見文（論証文）」に分類されるものが多いという傾向があります。しかしながら、「パラグラフ・ライティング＝意見文」ではありません。「英語表現」の授業で使用している教科書にも、さまざまなテキストタイプの書き方が扱われていることと思います。生徒が意見文以外の文章も書けるように、ぜひ指導していただきたいと思います。

パラグラフの階層性を理解する

意見文を書く練習が多いせいか、生徒の書く文章では、賛成か反対か、自分の考えをまず “I agree with the idea ...”と述べ、そのあとに「つなぎ言葉（discourse marker）」の First、Second、In conclusion を使えばよいのだ、といった安易なワンパターン化による誤解が広まっているのではないかという懸念があります。もちろん、自分の意見を支える理由が２つあって、１番目の理由を述べる際には First、２番目の理由を述べるときには Second を使うことは正しいのですが、**パラグラフには論理の構造がある**ということを無視して、文が並列されているケースを見かけます。

理由とは、書き手の考えを述べているものですから、ある程度は抽象的なものです。その抽象的な理由を支えるものとして、そのあとに具体例（specifics）、あるいは理由の言い換えなどが続き、さらに必要ならば詳細（details）を付けるのが本来のパラグラフの論理構造です。ところが、本来であれば理由の下位に位置されるべきものが、Second で導かれていて、あたかも理由１と同列のように取れてしまうという書き方が見られます。

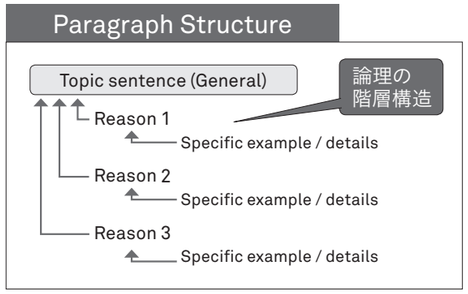
実際、高等学校で生徒のパラグラフ・ライティングの添削を担当しているある ALT も、“Discourse markers such as ‘First’ and ‘Second’ are used in students’ writing. However, they are wrongly put, so it is very confusing.”と語っていました。この点は、英検のライティングテストの４つの評価基準（①内容、②構成、③語彙、④文法）のうちの、②構成（英文の構成や流れがわかりやすく論理的であるか）にかかってくることだと思います。この問題を解決するために考案した、筆者自身が関わった実践研究（Oi, K. & Toyoshima, 2011）から改善の一途を示します。

次の文章は、実践前にプレテストとして、生徒に「中学生は勉強のために自分の部屋が必要か」という topic で書いてもらったものです（生徒の文章を一部改変）。

> I agree with this statement. First, if we don’t have
> 主張＝topic sentence　理由１
> our own rooms to study, we will be disturbed by the noise around us. Second, if we study in a
> 理由２
> room with television in it, we will no doubt watch it. If we get disturbed by the noise, eventually
> 理由１の具体的説明
> we will get annoyed and so the things we study won’t go into our brain. If we get attracted to the
> 理由２の具体的説明
> television, we will lose precious time to study. If we have our own rooms to study, we can study a lot in a small amount of time.

この書き方は、「理由１⇒理由２⇒理由１の具体的説明⇒理由２の具体的説明」となっていて、パラグラフの構造における論理の上位概念、下位概念がうまく整理されていないことが分かります。そこで生徒には、(1) パラグラフとは以下のような論理の階層構造があること、そして、書く前のアウトラインを作る際に（2）階層マップを書くことを指導しました。

パラグラフの階層関係

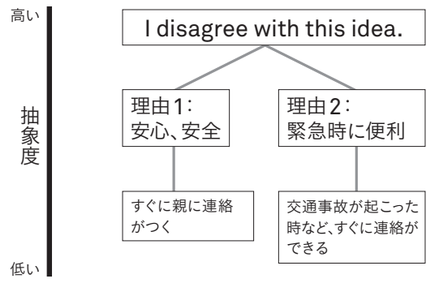


その結果、次の課題である「生徒が携帯電話を学校に持ってくるのは禁止すべきと思いますか？」という topic に対して、同じ生徒の書きぶりは次のように変化しました。

> I disagree with this plan. First of all, I think you
> 主張＝topic sentence　理由１
> need a cellphone for your safety. It may help you
> 理由１の具体的説明
> when you need to talk to your parents. Second of
> 理由２
> all, it could help you when there is an emergency.
> For example, when you have a traffic accident,
> 理由２の具体的説明
> it can be very useful. You can call an ambulance.
> For these reasons, I think school should not prohibit their students from bringing their cellphones to school.

この生徒はこの英文を書くにあたって、次のような階層マップを書いてから作文に取り組んでみました（生徒の手書きの階層マップをもとに作成）。

パラグラフの階層マップ



「パラグラフの階層関係をつかむ⇒階層マップを書く⇒アウトラインを書く」という流れで取り組むことを指導したところ、生徒は「理由（抽象的上位概念）のあとには具体例や言い換え（下位概念）でサポートする」という図式を組み立て、文章でもそれがしっかりと表出されるようになったのです。

論理の階層性を意識した指導を

このように、パラグラフ・ライティングにおいては、何でも First、Second で続ければよいのだという誤った考えを正し、生徒にパラグラフ内の論理の階層性ということにも着目させるよう指導したいものです。さらには、意見文だけではなく、さまざまなテキストタイプの文章にも習熟させたいところです。narrative（語り文）以外の説明文（expository）や意見文では、上記のような「論理の階層性」が存在します。生徒にはまず、多くのモデル文の分析を通して論理の階層性について明示的に指導（input）したのちに、さまざまな課題でのパラグラフ・ライティングに挑戦（output）させるという指導が望まれます。

【参考文献】

Oi, K. & Toyoshima, H. (2011). *A study on the effect of hierarchical concept mapping on writing by junior high school students.*『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻, 223-228.

「2018年度 全英連・英検共催 小中高英語教員向け国内研修」レポート

新学習指導要領を見据えて、児童生徒主体の授業づくりを学ぶ

全国英語教育研究団体連合会（全英連）は、教員の指導力向上を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）とともに、毎年7月に3日間の「全英連・英検共催 小中高英語教員向け国内研修」を東京都内で開催している。新学習指導要領を見据えて、小学校教員の指導力向上を図るため、今年度からは小学校教員も参加し、小・中・高等学校の教員が集い、学び合う研修となった。基調講演と参加者たちが作り上げた提案授業の内容をご紹介する。

1日目（7月23日）

活動内容の説明

小・中・高等学校の校種別に、担当講師が3日間の活動内容を説明。各校種とも4つのグループに分かれて活動する。授業案作成にあたって、講師自身の経験を踏まえた指導・助言を受ける。

2日目（7月24日）

授業案および評価案の検討

終日にわたり、グループ別に授業案と評価案を検討する。教科書・教材に基づき、各自が持ち寄った案を話し合い、設定した目標と指導、評価を一体化した授業を練り上げる。

3日目（7月25日）

模擬授業の発表

前日に練り上げた授業案を校種別に順次、実践発表する。発表者が教員役、ほかの参加者が児童生徒役となり、教える側と学ぶ側を体験する。発表後には担当講師から講評を受ける。

基調講演

コミュニケーション能力の育成を目指して ～自律した学習者を育てる～

名古屋外国語大学 外国語学部 英語教育学科長 教授　太田 光春 先生

授業の主体はあくまで子供たちであり、教員の役割は、子供たちに「英語を使って〇〇ができるようになる」といった明確なゴールを設定することにある。授業は、子供たちが身に付けた知識や技能を活用して、自分の考えや気持ちを伝え合う場である。だからこそ、子供たちの言語活動を充実させ、言語形式や音声について気付きを促したり、成功体験を積ませたりする工夫が、教員には求められる。

言葉は、人と人をつなぎ、コミュニケーションを円滑にするための道具である。人との関わりのなかで、その道具を使う経験がなければ、使えるようにはならない。英語を身に付けることは決してたやすいことではない。授業で「主体的、対話的で深い学び」を実現するためには、子供たちが主体となって活動し、間違いを恐れずに安心して学べる教室をつくらなければならない。そのために教員と子供たち、子供同士が相手を信頼し、敬意を払って学ぶための親和関係を築いていくことが必要となる。

私たちはなぜ知識や技能を身に付けるのか。これらを活用して社会に貢献し、自分の人生を豊かにするためである。しかし、学校で得た知識や技能はいずれ陳腐化する。だから、常にアップデート、アップグレードしていく必要がある。そのためには、子供たちを生涯にわたり学び続ける自律した学習者に育てていかねばならない。英語教育改革が進んでいるのはなぜか。それは全て、子供たちの将来の可能性を広げるためである。そのことを意識して授業改善に臨んでいただくことを期待している。

小学校 授業提案

単元を全4時限とし、時限ごとにグループを分けて作成した授業を発表。過去形を使って夏休みの思い出を伝え合い、彼・彼女などの三人称にも触れ、「子供たちが言葉に出合い、何度も繰り返し使って身に付ける」過程を大切にした授業を提案する。

第1時はIntroduction。「夏休みに行った場所について、積極的に話したり聞いたりすること」「過去形を使って自分の経験を話すこと」を目標とする。ここではアクティビティに入る前段階として、Small Talkを提案。既習の語彙や過去形などの表現を使って、教員役と児童役でやり取りをする。波や花火などの音を聞かせて、夏休みにどこで何をしたのかを考えさせた。

第2時では、cool、deliciousなど9つの形容詞をまずカードで提示し、会話を通じて意味を理解させたあと、キーワードゲームを導入する。児童役全員を立たせ、教員役に続いて形容詞を声に出して言うが、キーワードに選んだ語を教員役が発したときだけは、児童役は声に出さずに着席するというアクティビティだ。

第3時には、次時でのスピーチに備えて、"I went to … . I enjoyed ～ ing. It was fun."の表現を使って、週末に何をしたのかをペアで伝え合うSmall Talkを授業前半に取り入れた。やり取りをする際には、相手の言ったことを繰り返したり、相づち表現も取り入れたりしながらやり取りを楽しみ、自分が話したあとには、相手にも同様に尋ねることで会話を続けていく。後半では夏の思い出について同様にペアでやり取りをする。

単元最終時となる第4時は、自分の夏休みの思い出についてスピーチを行う。スピーチをするうえでは「アイコンタクト」「ジェスチャー」に加えて「クリアボイス」が大切であることを確認してから活動に入る。ペアでクリアボイスを意識しながら練習するなかで、誰の発表を友達に聞かせたいかを考えながらベストプレゼンテーターを選び、選ばれた児童役が全体の前で発表する。発表後は感想を伝え合い、各自が学んだことや気付いたことを振り返りカードに書いて授業を終える。

講評

思考を働かせ、即興的なやり取りができる言語活動を取り入れた授業づくりを

四国大学 文学部 国際文化学科 准教授　フェネリー・マーク 先生

子供たちの興味・関心を引くために、先生方はいろいろな工夫を凝らして授業をつくっており、子供たちに身近な題材を用いて授業を展開しようと、日々、教材や指導案の準備に多くの時間を割いている。今回の提案ではSmall Talkによる言語活動を取り入れた単元計画にした。繰り返し、相づち表現や、プラス1の質問などを取り入れて会話をつないでいるが、授業づくりのうえでは、子供たちがただ英語を聞くだけでなく、相手の話を聞きながら考え、質問し、即興的に答える力を育てるために、どのような活動を行うべきかを考えることが大切。子供たちが安心して、間違うことも怖がらずにやり取りができるよう、小さな成功体験を積んでいくことができるような指導が望まれる。

参加者の声

全国から集まった先生方とともに授業を考える貴重な体験ができた

宮崎県 延岡市立緑ケ丘小学校　津曲 康夫 先生

既習表現や対話を続けるための基本的な表現の定着を図るため、小学校ではSmall Talkがその手立てとされている。今回の授業提案でもSmall Talkにより、子供たちのコミュニケーション能力を高めることに重点を置いた。初対面の先生方と一緒に授業をつくるという貴重な機会を得て、めざすゴールに向かって、どのようにしたら子供たちが楽しみながら英語をインプットし、慣れ親しむことができるかを考えることができた。普段は県外の先生と知り合う機会は少なく、地域や校種を超えたネットワークが築けたことは、自分にとっても財産となった。今後も参加者同士で情報交換をしながら、授業改善に努め、県内の先生方にも学びを共有していきたい。

中学校 授業提案

今回は、生徒の話すこと、書くことを取り入れた「発表力を高める活動」を軸として、明確なゴール設定に基づいた授業を4つのグループが提案した。

第1グループは「日本のイメージについて、いろいろな考えを英語で伝えることができる」をゴールに設定した。まず、日本についてのイメージを生徒各自でマッピングさせてから全体で発表し合い、clean、safe、beautifulなどとホワイトボードに書き出していった。その後、各自が考える日本のイメージについて2つのトピックを選び、“I think Japan is … . I like … . It makes me … . ”の表現を使って情報を付け加えながら、ペアでメモを基に話す活動をして、最後には自分が話した内容を文章で書き表す。

第2グループは「社会的な話題に関して、聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを簡単な語句を用いて話すことができる」をゴールとした。メインアクティビティでは「日本に住む外国人が日本をどのように見ているのか」について、各自が1分間で考え、グループでディスカッションをする。学びの遅い生徒でも、グループ活動をすることで友達からの情報を得ながら、自分の考えをまとめ、全体の前での発表へとつなぐ。

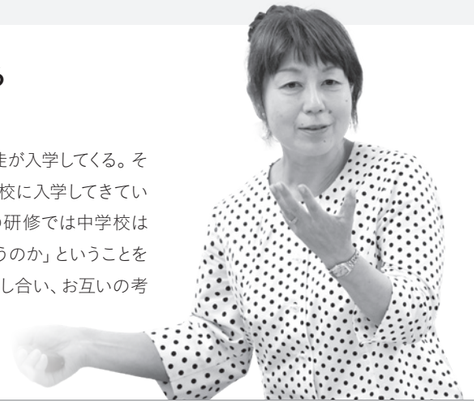
第3グループは「インタビューを通して、文化の違いを知ることができる」をゴールに設定し、インタビューによる即興性のあるやり取りを行い、その内容をまとめてグループで発表を行う。ペアで自分の好きなことについて尋ね合い、会話を続けたあと、自分が話した相手のことをグループ内で紹介する。さらに、近隣の大学の留学生にインタビューを行い、その内容をクラス全体に報告し、文化の違いについて理解を深める授業を提案した。

第4グループは「日常的な話題について伝えたり、相手の質問に答えたりすること」をゴールに設定。ALTと1対1で行うパフォーマンステストに向けて、授業ではペアでのやり取りを積み重ね、さらにほかの友達に対して報告する活動も取り入れる。「自分の大切にしているもの」をトピックに話し合い、質問を取り入れながら、少しずつ情報を足して内容を広げていった。

講評

先生方が話し合い、考えを共有できたことに意味がある

明海大学 教職課程 准教授　百瀬 美帆 先生



中学校では今後、小学校で外国語活動や外国語の授業を受けてきた生徒が入学してくる。そこで中学校の教員には、小学校でどのようなことができるようになって中学校に入学してきているのかを理解したうえで、指導計画を立てていくことが求められる。今回の研修では中学校は4つのグループに分かれ、「発表活動をどのように行い、どのように評価を行うのか」ということを考えて授業をつくり上げた。各グループで先生方が1日かけて、じっくりと話し合い、お互いの考えを共有できたことは意義深いことだったと思う。

参加者の声

地域や校種を超えた先生とともに考え授業をつくり、多くを学んだ

和歌山県 田辺市立東陽中学校　中元 佑実 先生

今回の研修では、中学校の先生たちと生徒の発表力を高めるための授業と評価について意見交換をして、お互いの実践について話し合うことができたのは貴重な機会となった。小学校の先生の子供たちを引き付ける力、子供たちが分かるような英語で話すといった姿勢に影響を受けた。また、高等学校の発表からは、教科書で扱う題材は難しくても、授業で取り入れている活動自体は中学校でも実践できることが多かったので、今後の授業でも実践してみたい。

高等学校 授業提案

生徒が高等学校に入学して2時間目に受ける「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業を設定。単元を4つのパートで構成し、4つのグループに分かれて、効果的な導入、内容理解を促すための音読、意見交換をしながらの内容理解、定着のためのレビューの流れで授業案をまとめた。

Part 1は、まず英語の授業を受けるうえでの5つのルール「L (Love)・E (Enjoy)・A (be Active)・R (Respect)・N (No worries)」の頭文字を示して、それぞれの意味をグループで話し合い、全体で共有することからスタート。続いて、単元のテーマの「名前」について取り上げた。「山中・山川・山木、李・Smith・佐藤。それぞれ何が共通するのか?」の問いにペアで話し合い、「山」が共通すること、中国・アメリカ・日本で多い姓であることが導き出された。そして、自分の名前を姓 (Family name) で呼ばれたいか、名 (Given name) で呼ばれたいか、理由を明確にしながらペアで話し、全体に共有した。

Part 2は、教科書本文をさまざまな方法で音読して内容理解につなぐ。最初に、先生役が読むのを教科書を見ずに聞く。次に、教科書を見ながら、先生役に続いて全体で声に出して読み、ペアで先生役と生徒役となって同様に読む。続いて、教科書を1文ずつ黙読してから、顔を上げて教科書を見ずに声に出すRead & Look upに挑戦する。さらに、教科書を閉じて、“How do you say your name in English?”の問いに対し、“I say my family name first.”もしくは、“I say my given name first in English.”の受け答えをペアで尋ね合った。

Part 3は、前のパートで学んだ内容の理解を深めるため、提示されたTrue or False Questionsについて、ペアで意見を交換しながら回答し、さらにペアを交代しながら理解した内容を共有し合う。

Part 4のディスカッションでは、先生役は4人グループに分かれ、それぞれSpeaker、Evaluator、Questionerの役割で活動する。ディスカッションを円滑に進めるための表現や語彙を練習してから活動開始。Speakerが話すのを聞く際に、Evaluatorは評価を行い、Questionerはメモを取りながら聞き、質問を投げ掛ける。Speakerには、即興で答える力も求められた。

講評

まずは教員が「変わる勇気」をもつことから

北海道札幌国際情報高等学校　木村 純一郎 先生

今回の授業提案では、生徒が思考する場面が多く取り入れられていたことを高く評価したい。授業をつくるうえで教員に求められるのは、目の前の生徒にとって何が重要なのかという「目的」を常に意識し、授業をマネジメントしていく力。生徒のために変わる勇気をもつこと。それこそが先生方の力となる。なぜ、授業を変えなければならないのか。それは目の前の生徒たちのためだ。英語を身に付けることは難しい。しかし、その難しいことに前向きに挑戦し、乗り越えていく力、勇気をもって前に進む力を育むことが、英語科教員に与えられた役割。英語を教えるとは、生徒たちの勇気を育てること。そのためにも、まずは先生方がリスクを背負い、自分が変わる勇気をもってほしい。

参加者の声

大いに刺激を受けた3日間の研修を、校内や生徒たちに還元したい

新潟県立国際情報高等学校　石野 比羽子 先生

生徒の積極性と主体性をいかに育むべきか、また、論理性をどのように高めていくべきかといった課題があり、県外へ出て刺激を受けて、授業改善のヒントを得たいと思い、参加した。3日間充実していて、まだ学び足りないほど。講師の木村先生から学ぶことは多く、先生との出会いは教師人生のターニングポイントにもなった。実際に生徒役で模擬授業を受けたことで、英語が苦手な生徒、人前で話すことに臆する生徒の気持ちも分かり、勇気をもたせることの大切さも実感した。また、今回の研修で築いた参加者同士のネットワークや学んだ内容を、校内の教職員はもちろん、生徒たちにどのように還元するかを考え、今後は県内だけでなく、いろいろな地域へと出て、さらに学んでいきたい。

直前特集

全英連滋賀大会に向けて

授業実演者インタビュー

11月16〜17日の2日間にわたり、「第68回 全英連滋賀大会」が滋賀県大津市で開催される。大会の見どころとなる第1日の授業実演は、新学習指導要領を見据えて、実演者が日頃、小・中・高等学校でどのような授業を行っているのか、その実践を間近に見ることができるとあって、大きな注目が集まる。大会を目前に控えた授業実演者たちに、研究テーマと取り組み、当日への意気込みを聞いた。
(取材は2018年8月当時)

第68回 全国英語教育研究大会（全英連滋賀大会）

Be Active!
〜児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育〜

第1日　11月16日：記念講演、授業実演
びわ湖ホール（滋賀県立芸術劇場）大ホール
滋賀県大津市打出浜15-1

第2日　11月17日：分科会、エクスカーション
ピアザ淡海（滋賀県立県民交流センター）
滋賀県大津市におの浜1-1-20

コラボしが21
滋賀県大津市打出浜2-1

第68回　全英連滋賀大会　検索

http://www.geocities.jp/shigaenglish/

小学校
授業実演

大津市立晴嵐小学校　平山 美穂 先生

発表学年：6年生
使用教材：『We Can! 2』（文部科学省新学習指導要領対応小学校外国語教材）
単 元 名：Unit 7「My Best Memory」

コミュニケーションの楽しさを味わい、自ら求めて学ぶ児童の育成

過去形を使えるようになることで、子供たちのやり取りや表現の幅は広がります。小学校6年間の思い出をテーマとする単元ですが、子供たちが話したり書いたりする必然性をもたせるため、学校生活だけに絞らず、県内で自分が経験したこと、例えば野球の大会に出場した、家族で旅行をしたといったことを語るようにします。ティーム・ティーチングを行うALTは、今年度から滋賀に来た先生なので、子供たちが滋賀の良さをALTに伝えたいという気持ちも込めて話せたらよいですね。子供たちがコミュニケーションの楽しさを味わいながら、自分の持っている表現を駆使して、英語でやり取りする力を付けていく様子を見ていただけるようにしたいと思います。

私は学級担任として、全ての教科を通じて子供たちに身に付けてほしい力が3つあります。それは、①自分で考えて行動し、最後までやり通す力、②多様性を認め、自分も相手も大切にする力、③コミュニケーションする力です。これらの力に「英語」が加わることで、子供たちの視野がさらに広がり、多くの人と触れ合うことができるようになります。子供たちは英語を使って、恥ずかしがらずに何でも話し合える関係性を築いています。授業で子供たち同士でやり取りをするのは、いつか自分が出会う、まだ見ぬ相手とコミュニケーションをするための準備です。だからこそ、安心して話せる友達とのやり取りをたくさん経験して、英語を使って話したり、聞いたり、理解し合ったりすることの楽しさを味わってほしいと願っています。そのためにも、子供たちが使える表現の幅を増やしたいと思います。子供たちが英語を好きな気持ちを育み、自ら英語を話したい、書きたい、英語で伝えたいという意欲をもてるような授業をつくっていきたいです。

中学校
授業実演

竜王町立竜王中学校　関口 真 先生

発表学年：3年生
使用教材：『NEW HORIZON 3』（東京書籍）
単 元 名：Unit 6「Striving for a Better World」

即興的な対話力と発信力の育成〜言語活動の指導と評価〜

世界の平和について考える単元の学習を通じて、生徒たちには「より良い世界をつくるために、自分たちには何ができるか」を考えさせ、話し合わせます。当日の授業では、生徒同士のグループインタビュー、プレゼンテーション、ミニミニディベート、グループディスカッションといった、さまざまな言語活動を取り入れます。これらの言語活動を通じて、生徒の即興的な対話力、発信力を鍛え、思考力・判断力・表現力を育みたいと考えています。

教科書の題材をいかに生徒が自分ごととして捉えることができるか。どのように題材を扱えば、生徒の関心・意欲を引き出すことができるのか。また、授業で生徒が行うコミュニケーションが自然な言語使用場面として成立するのか。日頃から、そのようなことを考えて授業づくりに臨んできました。

本校では1年生の入学段階から、生徒たちには間違いを恐れずに英語を使って話したり書いたりしようとする意識をもたせる指導をしています。2年生では即興ディベートを取り入れ、3年生ではディスカッションへと発展させ、生徒が自分の考えや思いを自分の言葉で発信することができる力の育成をめざしています。1学期に一度、ディスカッションを取り入れました。生徒たちは楽しんで活動していましたが、表現力や知識の不足から、単なる意見の出し合いに終わってしまい、議論が深まらなかったという課題があります。そこで2学期は、ディスカッションで使用する表現や議論を深めるための手立てを教え、インプットの量も増やして、アウトプットとのバランスを見ながら議論を深められるようにしていくつもりです。

全英連大会の舞台では、普段通りに物おじせずに楽しみながら活動する生徒たちの姿を見ていただきたいと思います。このような貴重な経験を通じて、生徒たちがさらに学習意欲を高めていくことができたなら、うれしい限りです。

高等学校
授業実演

滋賀県立虎姫高等学校　川瀬 千津 先生

発表学年：2年生（理系）
使用教材：『ELEMENT English Communication Ⅱ』（啓林館）
単 元 名：Unit 8「Selective Breeding」

虎姫高校で育てたい学習者像を目指した英語指導のあり方

本校では2020年の国際バカロレア（IB）コース開設をめざし、現在、グローバルな視点を大切に、課題研究や自己表現を重視した授業改善に取り組んでいます。英語科では生徒とCAN-DOリストを共有し、学習到達目標を明示しています。日々の授業では生徒と目標を確認しながら学習を進め、生徒自身による振り返りも大切にしています。CAN-DOリストには、4技能だけでなく学習スキル（思考力、自己管理能力、コミュニケーション能力、社会性、リサーチ力）も記載しています。これらのスキルは、IBが求める「10の学習者像」に通じ、多角的な視点で物事を思考し、自ら意欲的に学ぶ生徒を育てたいという私たちの思いに基づいています。

大会では、「チーム虎姫」として英語科教員全員、そして学校全体で取り組んできた実践に基づいた授業を発表します。授業展開は、帯活動である3人一組のスピーチ活動から開始し、そのあと、4人グループ10組が与えられたテーマに関して、賛成、反対それぞれの立場でリサーチした内容を発表します。発表を通じて、テーマへの理解を深め、最後には自分の意見を考え、相手に伝えるという流れを予定しています。深い思考を伴う言語活動に取り組み、質疑応答などの即興的なやり取りを通じて、生徒が自分の考えや思いを述べ合う姿を見ていただければと思います。全英連大会は、3年間の学びのなかで1つの通過点に過ぎません。しかし、この経験を通じて、生徒たちが達成感を味わい、英語に対して自信をもち、自分自身を表現することに喜びを感じることができるようになれば、それは教師としても幸せなことです。

「チーム虎姫」として授業改善に取り組んでいる

特別記事

2つの専門コースで グローバルリーダー育成をめざす

——大阪府立桜塚高等学校の英語教育と英検®への取り組み

大阪府による「学校経営推進費」の支援校として、2015年度より「英語教育の充実」を推進してきた大阪府立桜塚高等学校。生徒の英語力の向上やグローバルリーダーの育成をめざして、3年間かけて全校生徒の英検IBA（旧名称・英語能力判定テスト）受験や、実用英語技能検定（英検）準2級以上への合格者数増加などに取り組んできた。同校における英語能力向上のための取り組みや、グローバルリーダー育成をめざして設置した2つの専門コースの教育について、中田裕省校長と英語科の先生方にお話を伺った。

大阪府立桜塚高等学校
中田 裕省 校長

英語力の向上のための取り組み

今年で創立81年目を迎えた桜塚高等学校は、全教室に電子黒板を設置してICTを活用した分かりやすく効率的な授業や、数学や英語の少人数制習熟度別授業などを行っているのに加え、毎朝10分間のモジュール授業形式による朝学（国・数・英）、年12日の土曜授業、放課後や夏季休暇中の補習や講習など、生徒の学力を向上させる環境を整えている。

2015年度には、大阪府より「学校経営推進費」の支援校に指定され、「英語教育の充実」を課題に掲げ、生徒の英語力の向上とグローバルリーダーの育成をめざして、3カ年計画で授業改善に取り組んできた。

英語の授業では、4技能のバランスの取れた英語力を習得するため、ICTを活用し、教科書の題材に関連した映像資料を多用して本物の英語に触れる機会を増やした。また、少人数の習熟度別授業を展開し、1年次より生徒同士によるペアワークや音読などの言語活動も多く取り入れ、2年次にはディベートや発表などの発信力を高める活動にも取り組んだ。また、希望者向けの放課後の講習をはじめ、専門コースの授業では、外部講師を活用した指導も行ってきた。

また、同校では2015年度より各教科で「教科スタンダード」を作成しており、英語科ではCAN-DOリスト形式の学習到達目標を設定し、①4技能のバランスの取れた英語力の育成、②現行の大学入試においても対応できる実践力の養成の2つの目標を掲げた。1年次にはまず、コミュニケーション能力の基礎を培うため、長文を読むことに慣れ、リスニング力を身に付け、英語で自分の考えを表現する力を磨く。その後、身に付けた基礎を積み上げ、実践的なコミュニケーション能力を高めていくことで、大学入試にも対応できる力へと発展させていけるのだという。

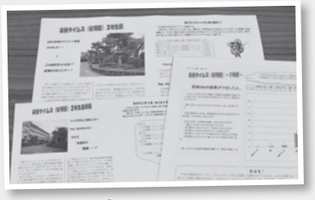
英検や英検IBAに取り組んだ3年間

同校では英検を生徒の英語力の評価指標に据え、成績上位の生徒は2級を、それ以外の生徒は準2級を目標とし、この3年間、2年生全員が英検受験に取り組んだ。

「英検受験に際して、生徒の受験級を決めるには、全校受験している英検IBAの結果が大いに参考になったと、英語科教員から聞いています」と中田校長は話す。「英検IBAは、短い時間で安価で受験できるため、全校で実施することができます。さらに試験結果のフィードバックが早く、前年度の試験結果との比較もしやすいため、生徒の英語力の伸びを把握することができますし、試験結果から、本校の生徒は筆記に比べてリスニングが弱いなど、指導を強化すべき点も明らかになり、参考資料として活用させていただきました」

また、同校では、英語科教員が毎月、『英検タイムズ桜塚版』を発行している。紙面を通じて日程の告知をはじめ、英検IBAの試験結果から分析した生徒の英語力の現状をグラフなどを添えて分かりやすく解説。生徒が自身の英語力を把握し、どの級を受験すればよいのかを考えさせるなど、英検受験を後押ししてきた。その裏面には、英字新聞の記事を注釈を付けて掲載し、読解に挑戦させるなど、英語学習の支援もしている。また、昨年度は3年生の朝学の時間に、英検協会の学校教材『Step Up Listening』にも取り組み、リスニング力の強化にも努めた。さらに、一次試験に合格した生徒には個別に面接の練習をするなど、教員全員が生徒の合格を応援する体制を整えてきた。

このように日頃の授業に加え、きめ細やかな指導が功を奏して、2015年度から3年間のうちに、2級合格者数が増加し、なかには準1級に挑戦する生徒も現れるまでになってきた。



毎月発行している『英検タイムズ桜塚版』

今年度は英検の全校受験の取り組みはしていないが、英語科教員たちは生徒の英語力や学習意欲の向上を間近に感じながら、英検の受験を希望する生徒へのサポートを続けている。昨年度までの取り組みは、現在も引き続き良い結果をもたらしており、今年度の2級合格者数は第1回検定で早くも13人に達し、昨年度の合格者数をはるかに上回った。

中田校長は、「生徒は大学入試で英検を活用することに興味を示しており、2級A以上であれば海外留学にも利用できることも生徒に知らせ、日頃の学習の成果を大学入試や留学にも生かせるようにしていきたい」と話す。

地域から世界へと羽ばたくリーダーを育てる

生徒たちの英語力向上が見られるなかで、グローバル人材育成への取り組みも進んでいる。同校では2015年度に、文系生徒対象の「グローバルスタディコミュニケーションコース（GSC）」と理系生徒対象の「グローバルスタディサイエンスコース（GSS）」の2つの専門コースを設置した。これらは1年次に希望者を募り、選考によって選択者を決定し、2、3年次に合わせて15〜19単位の専門教科・科目を学ぶ専門コースとなる。

GSCでは、英語の発展的学習に加えて、4技能を磨くため、連携した5つの大学（大阪教育大学、武庫川女子大学、大阪女学院大学、梅花女子大学、大手前大学）の教員による授業を展開する。また、中国語か韓国語のどちらかを選択して第二外国語をネイティブ教員から学ぶ。学校設定科目である「国際理解」では、大学教員や留学生、新聞社の海外特派員、海外で活躍する起業家、異文化共生をめざす地域NPOスタッフなど、現場で活躍する人々をゲストに招き、幅広い国際的視野に立った学習に取り組む。さらに、もう一つの学校設定科目である「課題研究」では、個人やグループで設定した研究テーマを探究し、課題発見力と発信力、プレゼンテーション能力の向上に努める。

一方、GSSでは、「理数数学」「理数物理」「理数化学」「理数生物」といった数学・理科の発展的学習を行う。大学や研究機関と連携し、大学教員の講演をはじめ、研究指導などの支援を受けている。また「課題研究」では、GSC同様に、個人やグループで設定した研究テーマを探究し、課題発見力と発信力、プレゼンテーション能力の向上に努める。

中田校長によれば、いずれのコースも学習意欲や英語力の高い生徒が集まり、「課題研究」の授業などでは、各自が興味・関心に応じた研究に取り組んでいるという。また、高校在学中もしくは大学進学後に留学したいと希望する生徒も増えており、交換留学生の世話をしたり、国際交流行事や語学研修などにも積極的に参加したりする姿が多く見受けられる。今春にはコース選択者の1期生が卒業したが、コース選択者以外と比べると、特にGSCコース生はセンター試験の英語の平均点は20点高く、英語力の高さが結果として現れた。進路選択に際しても、得意な英語を生かして、外国語系の学部を選ぶ生徒が多かった。

グローバルコースの担任をしてきた英語科教員は「生徒たちが高校に在学している間に、世界に目を向ける機会をできるだけ多くもてるよう、環境を整えてきました。今は学びたい意欲があれば、海外に羽ばたくチャンスは多くあります。大学へ進学したら、ぜひ世界を自分の目で見て、肌で感じて、体験してほしいと願っています。私たちはそのための土壌づくりをしていきます」と話す。

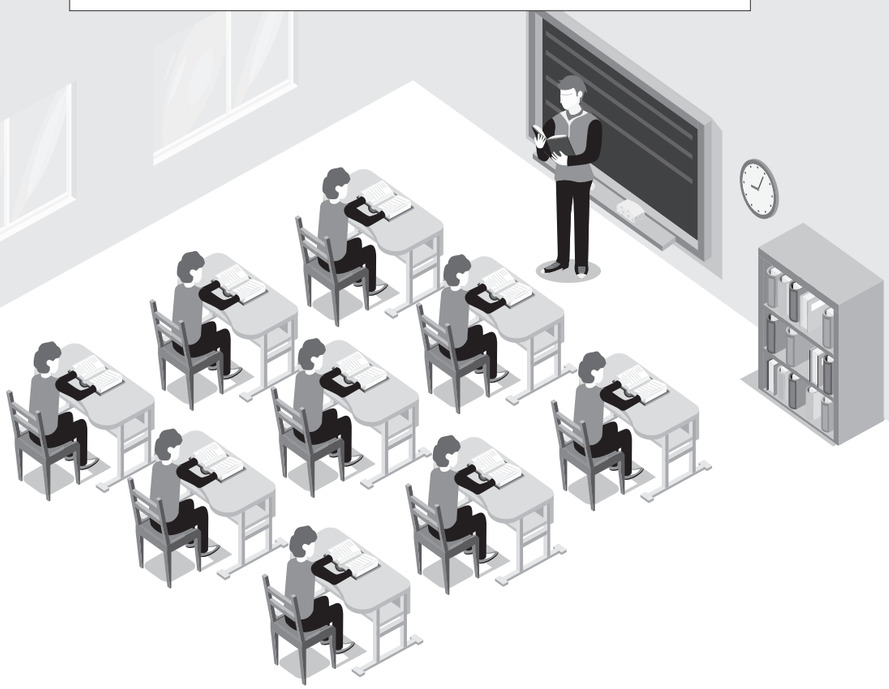
同校では、「地域に貢献し、国際化が進む社会で活躍できる人材の育成」をめざしている。中田校長は「今後も生徒の学力向上のために、卒業生や、隣接する豊中市役所をはじめとする公的機関、大学、各種団体との連携をさらに深めていくほか、地域と連携した教育活動や、短期・長期の留学生の受け入れ、海外研修、国際交流などの機会を充実させて、生徒の視野を広げ、人間力を磨き、高い志と夢を持ったグローバルリーダーを育てていきます」と語った。

「英語能力向上事業」から見えてきた 英語指導上の課題

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、英語学習者の実用英語の習得および普及向上に貢献すべく、2015年度から2017年度までの3年間にわたり、全国のいくつかの都道府県および市区町村の教育委員会を対象に「英語能力向上事業」を進めてまいりました。この事業は、各中学校・高等学校の生徒の皆様に、試験時間45分の「英検IBA」を受験いただき、先生方に成績分析結果をもとに、指導と評価のPDCAを繰り返していただくものです。

この事業により、中高生の英語能力に関するデータ、および英語能力向上に関する知見が英検協会に集積されてまいりました。この記事では義務教育最終学年である中学3年生のデータに絞り、なかでも苦手意識の強いリスニングに焦点を当てて分析しました。正答率に幅が見られたPart 2を例に、生徒の英語能力向上における課題と解決策を考えてみたいと思います。

分析対象：英検IBA Test D
出題レベル：英検3級〜5級レベル
受験対象・受験者数：中学3年生・78,923名
受験時期：主に2016年10月、11月



小問別正答率の傾向

Part 2は、英文を1人の話者が語るモノローグによる英文と質問文を聞き、問題冊子に印刷された4つの選択肢から答えを選ぶ形式で、全15題あります。まず【表1】より、Part 2の平均正答率は61.0%で、小問別の正答率は、23.4% (No. 29) から84.2% (No. 16) まで幅があることが分かります。なお、Part 1（会話）の平均正答率は80.4%でPart 2より高く、小問別の正答率の最低値は64.8%でした。

次に、Part 2の小問別正答率を出題レベルと比較してみましょう。英検4級レベルの問題よりも3級レベルの正答率が低い傾向にありますが、級が上がれば言語材料も高度になるため、これは当然の結果と言えます。しかしながら、中学2年生修了目安とされる4級レベルの問題でも50.1%(No. 23) や50.6%(No. 22) のように、平均正答率よりも低く、3級レベル同様のものがあります。また、3級レベルの問題は5題ありますが、No. 29の正答率は23.4%と、突出して低い結果となりました。「テキスト分析」の観点から、その理由を探りましょう。

【表1】

問題番号	出題レベル	正答率（平均61.0%）	問題文の語数	一文の平均語数	解答文の語数	質問文の語数	選択肢の語数
16	4級	84.2%	25	8.3	8	8	7
17	4級	80.0%	21	10.5	8	5	17
18	4級	75.0%	30	10	7	6	10
19	4級	68.2%	17	5.6	7	5	12
20	4級	67.5%	21	10.5	11	7	10
21	4級	72.3%	22	5.5	7	6	7
22	4級	50.6%	20	10	13	5	9
23	4級	50.1%	26	12.5	21	6	18
24	4級	67.2%	22	7.3	5	5	11
25	4級	65.3%	27	8.6	6	5	7
26	3級	60.3%	28	14	13	6	8
27	3級	46.0%	30	7.5	13	6	19
28	3級	51.6%	37	12.3	14	8	9
29	3級	23.4%	27	13	12	7	12
30	3級	53.2%	42	10.5	12	6	11
正答率との相関係数			-0.32	-0.46	-0.60	-0.14	-0.29

※相関には正の相関と負の相関があります。負の相関（-）とは、一方が上昇するにつれて、一方は下がるということです。今回は相関係数（絶対値）が0.8以上を超えると高い相関、0.6-0.7程度を中程度の相関と定義しました。

テキスト分析の２つの観点

テキスト分析の観点として今回は、①量的要因、②質的要因の２つの観点に分けております。

①量的要因：提示する英語の量に関する要因で、リスニング問題に関しては以下の観点が考えられます。
- ▷問題文の語数
- ▷問題文の１文の平均語数
- ▷解答文の語数（正答のキーとなる情報を含む文の語数）
- ▷質問文の語数
- ▷選択肢の語数

②質的要因：問題文・質問文・選択肢で提示される英語の質的な要因で、特に問題文と質問文・選択肢間での言い換えの程度等を指します。

［分析の観点：①量的要因］

本来であれば、上記の５つの項目それぞれが正答率に与える影響について、数値的に重回帰分析等での検証を行う必要がありますが、今回は基礎的な調査と位置付け、各項目と正答率との相関係数に着目して検証を行いました。【表１】では、小問別に各項目ごとの数値を並べ、かつ各項目と正答率との相関係数も記載しています。

５つの観点の中で、中程度の相関を示す相関係数（絶対値）0.6以上を示したのは、解答文の語数と正答率との相関性でした。つまり、解答文（正答のキーとなる情報を含む問題文）の語数が多くなるほど、文構造も複雑になる場合が多く、生徒は情報を処理しきれなくなるということだと言えます。実際に、解答文の語数が平均（10語）を超える小問の多くは、平均正答率より下回る傾向にあります。４級レベルで正答率が低いNo. 22やNo. 23も、ここに含まれます。No. 22の類似問題１を例に見てみましょう。

※英検IBAの問題は非公開なため、この記事では類似問題を使用して解説します。

類似問題１

Mary goes to an art school in Boston, <u>but her parents live in Florida.</u> She sent them some presents for Christmas.

Question: Where do Mary’s parents live?

1 At an art school.　　**2** For Christmas.
※**3** In Florida.　　**4** In Boston.

※正答

No. 22の正答率は50.6％、また、解答文の語数は13語（類似問題１では14語）で、Part 2の10問中３番目に長くなっています。また、正答が含まれている文（太字）は、逆接の接続詞butにより、２つの相反する意味の節がつながっています。しかも、このbut以下（下線）に正答のキーとなる情報が含まれています。最後まで集中して論理の展開を聞き取る必要があります。No. 23も解答文は同様の文構造でした。中学２年生修了レベルを目安とした４級レベルの言語材料でも、文の長さや接続詞の登場で文構造や論理展開が複雑になると、中学３年生であっても、理解がおぼつかなくなる生徒が多くなるようです（もちろん、ほかの要因も考えられますので、継続的に調査は続けていく予定です）。

［分析の観点：②質的要因］

３級レベルの小問に着目すると、量的な条件がほかと変わらないにもかかわらず、No. 29のように、正答率が比較的低い問題があります。文部科学省による「平成29年度 英語教育実施状況調査」（中学校）の結果によれば、英検３級相当以上の英語力を有する中学３年生は全体の40.7％ですが、３級相当以上の英語力を有する生徒でも誤答をする問題だと言えるかもしれません。

ほかの小問と違うポイントは、「質問文や正答となる選択肢の英語については、本文中の表現から異なる表現へ言い換えられている」ということです。類似問題２では、本文中の解答文（太字）においてHiroshi will go to China（下線部）となっていますが、質問では（How long）will Hiroshi be in Chinaと言い換えられています。同様に、期間は問題文ではfor a six-month（下線部）と表現されていますが、正解選択肢である４では、For half a year.と言い換えられています。言い換えは文字面だけでなく、意味をしっかりと理解しているかを問う手法ですが、中学３年生にはまだ対応が難しいようです。

類似問題２

Next year, <u>Hiroshi will go to China</u> <u>for a six-month vacation.</u> He wants to visit many places there and learn how to speak Chinese.

Question: How long <u>will Hiroshi be in China</u>?

1 Next year.　　**2** For a month.
3 For a year.　　※**4** <u>For half a year.</u>

※正答

分析結果から〜課題と改善の方向性

今回の英検IBA Test Dの受験結果分析から見えてきた課題、および解決するための指導の方向性は以下の２点にまとめられます。

〔課題１〕 １文の語数が多く（＝文が長い）、文構造が複雑になると理解しづらくなる。
→情報の処理単位を短から長へ伸ばすリスニング、リーディング活動を取り入れる。

〔課題２〕 質問文や選択肢が本文とは別の表現で言い換えられると意味を変換できなくなる。
→教科書で学ぶ表現と同じ意味を表す多様な表現に触れる機会を授業中に増やす。

〔課題１〕を解決する具体的な方法としては、チャンク・リーディングやチャンク・リスニングがあります（例１）。使用する教材の英文を、生徒が理解可能な長さの意味のまとまり（＝チャンク）に区切ります。リスニングであれば区切りごとにポーズを入れて聞かせ、リーディングであれば区切りごとにスラッシュを書き入れて、スラッシュごとに意味を理解できているか確認するものです。これは、英語を英語の語順で理解する練習にもなります。文全体では意味を取ることが難しくても、意味単位が短くなると理解できる生徒も多くなります。また、ポーズの間に音声を復唱させる「リピーティング」という手法も、チャンクごとにしっかりと英語を捉える練習となります。

（例１）
Mary / goes to an art school / in Boston, / but her parents / live in Florida. / She sent them / some presents / for Christmas./

〔課題２〕については、先生方が授業の導入でされているSmall Talkについて、今まで以上に意識的に教科書で学ぶ表現の言い換えをなされることをお勧めします。ある単語を多様な表現で理解できることは、ひいては生徒の表現力の幅が広がることにもつながります。先に紹介した類似問題２も、Small Talkで次のように言い換えることもできるでしょう。

（例２）
Today, I’ll talk about my friend, Hiroshi. He will study abroad next year. He will be in China for half a year. What is he going to do there? Let’s listen!

ここでは、2015年度より進めてきた「英語能力向上事業」について、2016年度の実施結果より中学３年生に焦点を当てた分析内容をご紹介いたしました。英検協会では今後も、テスト結果から集積された知見等を皆様と共有させていただきたいと考えております。

英語教員海外研修 帰国後の学び

第18回小学校英語教育学会（JES）長崎大会に集う研修参加者たち

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は毎夏２週間にわたり、小・中・高等学校の英語教員を対象とした「英語教員海外研修」をオーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）で実施している。研修参加者たちは帰国後も、互いに情報交換をしながら研鑽を積み、授業改善に努めている。2018年7月28〜29日、長崎大学にて開催された「第18回 小学校英語教育学会全国大会（JES長崎大会）」に集まり、学びを深めていた参加者たちの様子を追い、レポートを寄せていただいた。

研修参加者たちも自由研究発表に登壇

1,100人もの来場者を迎えて開催されたJES長崎大会。今大会のテーマは「移行期を充実したものにし全面実施にどう備えるか―新学習指導要領の実現と新教材の活用―」だった。新学習指導要領の全面実施に向けて、小学校では現在、2年間の移行期間の授業をどのように充実させ、新教材を活用していくべきかが課題とされている。大会では、学会の会員による課題研究発表や自由研究発表（口頭、ポスター）をはじめ、実践的なワークショップやセミナー、講演（基調講演、特別講演）、シンポジウムまで、さまざまなプログラムが用意された。授業改善を進めるうえで身に付けておきたい理論や、明日からの授業で活用できる指導法などを学ぶ場として、会場となった長崎大学には全国から来場者が集まり、熱気にあふれていた。

会場では、英検協会主催の「英語教員海外研修」の参加者たちの姿も見受けられた。自由研究発表で実践報告をする先生もいれば、各プログラム会場で学びを深めて活発に意見交換する先生もおり、意欲的に自己研鑽を積んでいる様子が見て取れた。

1日目の自由研究発表では、愛知県尾張旭市立本地原小学校の鈴木由季子先生（2016年度参加者）が「全面実施へのスムーズな移行期の取り組みに向けて」をテーマに登壇。尾張旭市では、英語力に自信がなかったり、外国語の授業のイメージが持てなかったりと、不安を抱えている教員がまだ多いという。不安を少しでも払拭するために、全面実施に向けて行っている取り組みとして、教員研修、授業実践、英語教育推進委員会について紹介した。また、取り組みを始めてからの、教員の外国語活動の授業に対する向き合い方の変化についても併せて報告した。

また、広島市立戸坂城山小学校の戸井一宏先生（2017年度参加者）は、「シャドーイング練習が小学生のリスニング向上にもたらす効果」の研究内容を発表。小学6年生を対象として、15分のシャドーイング練習を月10回行い、その効果を分析した。さらに、英検Jr.のスコアと児童アンケートをもとに、シャドーイング練習がもたらした効果も報告した。

移行期を充実させるための指導と評価のあり方を考える

2日目には、福岡市立石丸小学校の長門直子校長、JES会長で北海道教育大学札幌校の萬谷隆一教授、文部科学省初等中等教育局の直山木綿子教科調査官をシンポジストに迎えて、「移行期を充実させるために―5領域の指導・評価」をテーマにシンポジウムを開催。JES九州ブロック常任理事で琉球大学の大城賢教授がコーディネーターを務め、指導と評価にポイントを絞って小学校、教員養成、国の立場からそれぞれ意見を募った。

「2年後の全面実施を見据えて、いかに移行期の教育を充実させるかは、学校長や行政の強いリーダーシップ、マネジメントの力にかかっている」と強調する長門校長は、「本校では十分な教材研究の時間が取れるように、校内の会議は全て月曜に集中して行い、火曜から金曜は教材研究などに充てられるようにした。また、教材を共有できるような環境整備も進めている。教員は子供たちの実態をしっかりと把握したうえで、指導を考えることが大切であり、新学習指導要領を正しく理解し、教員全体で共通理解を深めて授業の質的向上を図り、子供たちの学びを支えていきたい」と述べた。

それを受けて萬谷教授は「これからは教員研修が大切になる。なかでも教材研究は必要」と言葉を添えた。そして、「新教材を活用するためには、子供の実態に合わせて指導することが大切であり、単にデジタル教材を使って進めるだけではなく、まず目標を提示して、子供たちが何のために活動するのかを理解してから進めることが大事。教員の役割は、子供たちが言いたいことや聞きたいことを、どのようにして掘り起こすか。そのような活動が中心に据えられた授業をたくさん実践してほしい」と望んだ。

教科化にあたり、評価について情報がほしいという要望も多く寄せられるなか、直山教科調査官は「小学校の学習評価については、学力の3要素に合わせた3つの観点が中央教育審議会答申で記されている。現在まだ審議中で確定したものを示すことができないが、大事なことは、学習到達目標と指導、そして評価は一体であるべきだということ。どこまで達成できたかということだけではなく、それを指導の改善に役立てることのできる評価であってほしい。少なくとも言えることは、子供たちが新しい語彙や表現に出合ったときに、日本語を介さなくても、子供たちがコミュニケーションの目的や場面、状況から推測をすることができる活動を授業で行うこと。推測をしているときには子供たちの思考が働いており、主体的に理解しようと関わろうとする。子供たちは、そうして語彙や表現を蓄えながら、自分の考えや思いを伝えるときにどの表現を使えば一番相手に伝わるかを思考し、表現を選んで判断し、使ってみようとする。そのなかで思考力・判断力・表現力や、主体的な態度を見取ることができる。学級担任による授業が求められるのは、そうした子供たちの学びの姿を誰よりも分かっている人が見取り、指導できるという思いからである」と語った。

英語教員海外研修参加者による大会参加レポート

熊本県合志市 学校教育課 小学校英語指導講師　江口 典子 先生
（2016年度 研修参加者）

私が合志市内の小学校で英語の講師を始めてから今年で8年目になります。今年度から市内では、中学年で年間35時間、高学年で年間70時間の授業を行うことになりました。ほかの地域ではどのような指導をしているか、また、週1回程度の指導にもかかわらず、習熟度が比較的高いことが多い民間の塾と公立校との指導方法の相違などを学びたいと思い、JES長崎大会に参加しました。

また、もう1つの楽しみは、2016年度の英語教員海外研修でともにUNSWで学び合った全国の先生たちと再会できることでした。海外研修の仲間とは、今なおグループトークでつながっていて、日々の授業について相談することも多々あります。

JES長崎大会の発表や、海外研修の仲間との再会を通じて、子供たちの成長段階に合わせて、それぞれのレベルで伝え合う相手を意識して発話することはもちろん、書いて伝えるコミュニケーションについても学ぶことができました。そして、私がこれまで大切にしてきた、児童の五感を最大限に刺激できるような授業を、引き続き行うことに思いを強くしました。

英語教員海外研修参加者による大会参加レポート

北海道 小樽市立潮見台小学校　山口 千佳 先生
（2016年度 研修参加者）

小樽市では今年度より3、4年生で年間35時間、5、6年生で年間70時間の授業を行っています。昨年度までは全時間に入っていた外部講師が、今年度は各クラス年間20時間程度しか入ることができなくなり、学級担任主導で授業を行うことを余儀なくされています。私は、学級担任として授業を実践するほか、校内の外国語推進教師という立場でもあります。新教材の活用の仕方について校内で共通理解を図ることや、教員全員が使いやすい環境を整備することに課題を持っていました。

JES長崎大会での大きな収穫は、文部科学省の指導計画を基に、全国で編成された教育課程とその課題を聞けたことでした。また、環境整備については、シンポジウムでの学びから、教材保管棚をすぐに用意し、文部科学省からインターネット上で配布されているピクチャーカードを全て印刷してラミネート加工し、必要な時に誰でもすぐに使えるように整えました。外国語推進教師として、まずは学級担任が1人で授業を行うための環境を充実させ、学校全体で教材研究を進めて、新教材を活用できる体制づくりを目標としています。

『英語情報』オススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。
今回は、『英語情報』連載記事執筆者の百瀬美帆先生と池田周先生よりご推薦いただきました。
英語の朗読の技術、小学校で英語を教えるためのエッセンスを学ぶことができる書籍です。

1 『英語は朗読でうまくなる！』

青谷 優子（著）
アルク　定価1,620円（税込）　2017年12月発行
朗読CD 1枚付き

明海大学 教職課程 准教授
百瀬 美帆 先生

生徒の前で英文を読み聞かせた経験のある英語の先生方に、ぜひ読んで、聴いていただきたい1冊です。元NHKアナウンサーで、現在はプロの朗読家である著者ほど上手に朗読できるようにはなれないかもしれませんが、本書に記されている準備運動としての「音読」から、聞き手に届けるための「朗読」へ引き上げる段階を踏むことで、朗読のためには発音の基礎を大切にしなければならないこと、さらには深い内容理解が必要であることが体得できます。著者が朗読している文学作品にじっくりと耳を傾け、その情景や登場人物の心情を共有するだけでも、英語学習の大きな動機付けとなるはずです。

2 『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ　小学校外国語科内容論』

酒井 英樹・滝沢 雄一・亘理 陽一（編著）
三省堂　定価2,052円（税込）　2017年7月発行

愛知県立大学 外国語学部 准教授
池田 周 先生

小学校で英語を教えるために必要な知識を、ミニマム・エッセンシャルズとして概説することを目的としてまとめられた書籍です。ただし、具体的な指導方法がまとめられているわけではありません。「教職課程コアカリキュラム」のうち、特に小学校の「教科に関する専門的事項」を参考に、コミュニケーション論、第二言語習得論、英語学、異文化理解、児童文学など外国語科で扱う内容に焦点を当て、本当に重要なエッセンスとも言える部分が分かりやすく解説されています。国語教育と外国語教育の連携の視点も取り入れられています。現在教職課程を履修している学生さん方だけでなく、外国語活動や外国語を担当する小学校の先生方にもぜひお読みいただきたい1冊です。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。
ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.55のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

① 氏名　② 所属（勤務校名）・役職　③ 連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）　④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由　⑥今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切 **2019年1月14日（月）**　応募方法 **03-5439-6879**　**eigojoho@morecolor.com**

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

『英語情報』オススメ本プレゼント
FAX申込用紙

プレゼント申込専用FAX番号
『英語情報』編集部宛
03-5439-6879

P.54でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に〇をして、下記の必要事項をご記入のうえ、FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに〇印をご記入ください。

1 『英語は朗読でうまくなる！』	2 『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ　小学校外国語科内容論』

氏名	(氏) フリガナ	(名) フリガナ　様
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 □□□-□□□□ 都 道 府 県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1. 『英語情報 秋号』で興味深かった記事は何ですか？ 該当するものの番号に〇をつけてください。（複数回答可）

1. 緊急企画 がんばろう西日本
2. NEWS&TOPICS
3. 特集「小中高連携のあり方」
4. 特集事例 CLASS REPORT
5. 授業改善と評価のあり方
6. 授業で使える「評価」のためのアイデア
7. 英語で授業7つの鉄則
8. 新学習指導要領に向けて（小・中・高）
9. 高大接続改革ニュース
10. TEAP Hot News! TEAP連絡協議会レポート
11. 英検ライティングテストを活用した発信力の育成
12. 全英連・英検共催 小中高教員向け国内研修
13. 全英連滋賀大会に向けて
14. 特別記事　大阪府立桜塚高等学校の取り組み
15. 「英語能力向上事業」から見えてきた英語指導上の課題
16. 英語教員海外研修 帰国後の学び
17. 『英語情報』オススメ本

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。

Information

編集後記

このたびの西日本豪雨や、北海道胆振東部地震により被災された皆様に謹んでお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧を心よりお祈りいたします。

今号は「外国語教育強化地域拠点事業にみる小中高の連携」をテーマに特集を組み、文部科学省の直山木綿子教科調査官に、同事業の成果と課題についてお話を伺うとともに、事例の一つとして、千葉県流山市の取り組みをご紹介しました。新学習指導要領の実施や大学入試改革を見据えて、今後は拠点校に限らず、どの地域においても、形式的な連携ではなく、小学校から高等学校までの学習内容や指導がつながり、「言語活動の充実」がさらに深まることが望まれます。また、「高大接続改革ニュース」では、大学入試改革に向けて、大学入学共通テストの仕組みや、TEAP、英検を大学入試でご活用いただくことのメリットなどもAR動画でご紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

『英語情報』編集部一同

英語情報 2018 秋号

2018 年 10 月 15 日発行

発行　公益財団法人 日本英語検定協会
総務部 総務課
〒162-8055
東京都新宿区横寺町 55

編集統括　株式会社モアカラー
アートディレクション・制作　株式会社モアカラー
印刷　日新印刷株式会社
製本　有限会社穴口製本所

◎無断転載、複製を禁じます。
©2018 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題　http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報　http://www.eiken.or.jp/eiken/result/

本誌について

お問い合わせ先 **英検サービスセンター　TEL 03-3266-8311**

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。

http://www.eiken.or.jp/eiken/group/

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようにお願いいたします。

● 英検申込受付に関すること（出願、検定料など） ● 英検受験に関すること（受験票、会場、合格通知など）	英検サービスセンター	（個人）03-3266-8311 （団体）03-3266-6581
● 英検 Jr. に関すること	英検サービスセンター	（英検 Jr.）03-3266-6463
● 研究助成に関すること	英語教育研究センター	03-3266-6706
● BULATS・GCAS に関すること	BULATS・GCAS 事務局	03-3266-6366
● IELTS に関すること	IELTS 事務局	03-3266-6852
● TEAP に関すること	TEAP 運営事務局	03-3266-6556
● 英検留学に関すること	英検留学情報センター	03-3266-6839
● 通信講座に関すること	通信教育課	03-3266-6521
● その他のお問い合わせ	英検サービスセンター	03-3266-8311

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

2018年度 実用英語技能検定 試験日程

第1回検定（終了しました）

申込受付 3/9(金)～5/11(金)　協会必着
【書店締切：5/7(月)】

一次試験（筆記・リスニング） 6/3(日)

準会場　すべての団体 6/2(土)・3(日)
中学・高校のみ 6/1(金)

二次試験（面接形式のスピーキング）
A日程 7/1(日)　B日程 7/8(日)

第2回検定

申込受付 8/1(水)～9/14(金)　協会必着
【書店締切：9/7(金)】

一次試験（筆記・リスニング） 10/7(日)

準会場　すべての団体 10/6(土)・7(日)
中学・高校のみ 10/5(金)

二次試験（面接形式のスピーキング）
A日程 11/4(日)　B日程 11/11(日)

第3回検定

申込受付 11/30(金)～12/26(水)　協会必着
【書店締切：12/19(水)】

一次試験（筆記・リスニング） 2019/1/27(日)

準会場　すべての団体 1/26(土)・27(日)
中学・高校のみ 1/25(金)

二次試験（面接形式のスピーキング）
A日程 2019/2/24(日)　B日程 2019/3/3(日)

※4級・5級のスピーキングテストの受験日はお申し込みいただいた各回次の一次試験合否閲覧日から受験が可能です。各回次の二次試験日（1級～3級）から約1年間ご受験いただけます。
詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイト（http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/4s5s/）をご覧ください。

TEAP利用で、入試が変わる

TEAPを受験して合格に近づこう！

高校2年生 以上対象

受験のチャンスは **年3回**

複数学科の出願に利用可能
※出願基準点等の条件は各大学にお問い合わせください。

TEAPを利用した入試とは

アカデミック英語能力判定試験（TEAP）を受験し、各大学で設定しているTEAPの出願基準点を事前にクリアしていれば、各大学がそれぞれ実施する英語の試験は受けなくてもよいなどの入試制度です。

「大学教育レベルにふさわしい英語力」を
正確に測定するアカデミック英語能力判定試験

TEAP
Test of English for Academic Purposes

2018年度 試験日程・申込期間

第1回（終了しました）	第2回（終了しました）	第3回
7月2日(日)実施	9月16日(日)実施	11月18日(日)実施
申込期間 5月14日(月)～6月28日(木)※	申込期間 7月9日(月)～8月16日(木)※	申込期間 9月10日(月)～10月25日(木)※

※コンビニ・郵便局ATM支払による申込は、試験申込締切日より約10日前に締切ります。ご注意ください。詳しくはTEAPウェブサイトへ。

グローバル×IT社会を牽引する
思考力・判断力・表現力をリアルに測定する
英語4技能を超えたテスト

TEAP CBT

2018年度 試験日程・申込期間

第1回（終了しました）	第2回（終了しました）	第3回（試験日せまる！）
6月17日(日)実施	9月2日(日)実施	10月21日(日)実施
申込期間 4月16日(月)～5月24日(木)※	申込期間 6月25日(月)～8月9日(木)※	申込期間 8月13日(月)～9月27日(木)※

※コンビニ・郵便局ATM支払による申込は、試験申込締切日より約1週間前に締切ります。ご注意ください。詳しくはTEAP CBTウェブサイトへ。

お問い合わせ　公益財団法人 日本英語検定協会　英検サービスセンター TEAP運営事務局
TEL. 03-3266-6556 ※平日9:30～17:00（土・日・祝日を除く）

詳細・サンプル問題はこちらから
http://www.eiken.or.jp/teap/

英語情報 2018 秋号

2018年10月15日発行　季刊発行　第21巻4号　通巻132号　公益財団法人 日本英語検定協会　〒162-8055 東京都新宿区横寺町55

英検
公益財団法人
日本英語検定協会
Eiken Foundation of Japan